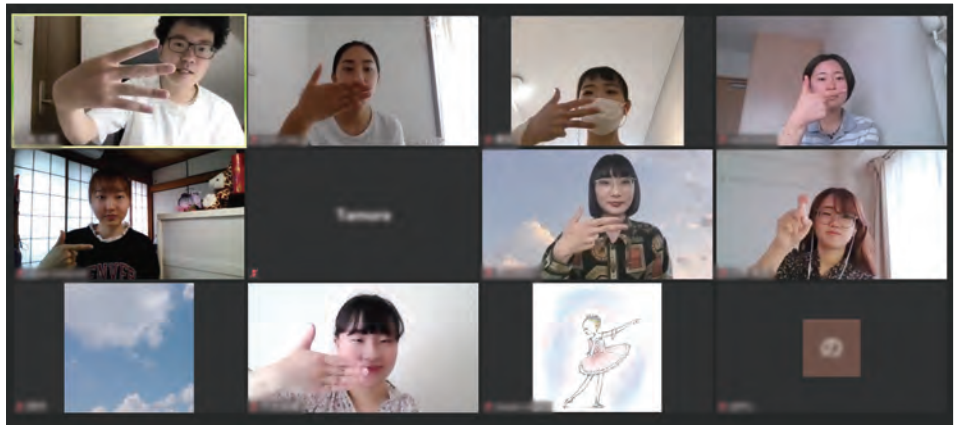




2021年度

明治大学 ボランティアセンター活動報告書

Meiji University Volunteer Center



2021年度ボランティアセンター活動報告書発刊にあたって

西山 春文 ボランティアセンター長
(学務担当副学長兼学生部長、商学部教授)

新型コロナウイルス感染症による活動制限を受け始めて2年、社会も大学もその大きな影響下にあり、先行きの不透明な状況が続いております。

2021年度も制限と制約の多い環境にありましたが、本センターでは、関係教職員ならびに学生の熱意と創意工夫により、主体的かつ無償の貢献活動を続けてまいりました。関係者の皆様の御尽力に心より御礼申し上げます。

私達にできるボランティア活動には、本学学生・教職員としての活動、社会の一員としての活動、そして人と人を結びつける活動があります。2021年度も各キャンパスの特性を生かした、これら多様な視点から工夫を凝らした有意義な活動に取り組んでまいりました。

駿河台ボランティアセンターでは、災害・防災をテーマとした講座を開催してきましたが、2021年度はそれを初めて完全オンラインで実施することにしました。また、関西大学・法政大学との合同防災ワークショップも実現しました。

和泉ボランティアセンターでは、2020東京オリンピック・パラリンピックを契機とした、SDGsを考えるイベントや被災地支援に関する講演会の開催等、新しい企画にチャレンジしました。

生田ボランティアセンターでは、こども科学教室の企画をオンラインで行うことを検討しましたが、こども対象の企画は特に対面でなければ得られないものがあるとの結論に至り、感染拡大防止に十分に配慮した上、対面で行いました。また、学生は自分の経験を伝える方法として対面とオンラインの併用を選択し、積極的な発信を心掛けました。

中野ボランティアセンターでは、清掃活動・語学教室・手話カフェなどを開催しました。中にはオンラインで対応したものもありましたが、時にはオンラインならではの難しさにも直面しました。

このように2021年度はそれぞれの活動に合わせ、考えられる限りの形式と方策に基づいて活動してまいりました。予想以上の困難もありましたが、新たな発見もあり、いずれも今後の活動に生かしていくことにしています。

新型コロナウイルス感染症の終息まで見通しのつかない状況にありますが、人々は変わらずに絆を求め、共に成長を願っていくはずです。本センターではそれを実現するべく、この先も活動を継続してまいります。

本学ボランティアセンターの活動に一層のご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ボランティアセンターの理念・目的

学生生活支援の理念は、高い社会性・共同参画意識を有する、自立した社会人としての基礎力を有する人材を育成するために、正課外教育の観点から、課外活動を含めて充実したキャンパスライフを学生が送れるように、学生生活全般の充実とそのためのキャンパス環境の整備を図ることにある。この理念の下で、明治大学ボランティアセンターは、正課外教育の観点から、学生に対するボランティア活動の支援を全学的に推進することにより、学生の社会性及び自主性を涵養し、もって社会に有用な人材を育成することを目的としている。

2021年度ボランティアセンター運営委員会名簿

センター長			
農学部 教授(学務担当副学長兼学生部長)		浜本 牧子	
副センター長			
駿河台担当 文学部 准教授		平山 満紀	
和泉担当 情報コミュニケーション学部 専任講師		高橋 華生子	
生田担当 農学部 専任講師		伊藤 善一	
中野担当 総合数理学部 准教授		渡邊 恵太	
運営委員			
理工学部 准教授 (ボランティアセンター担当副学生部長)	池田 有理	農学部 准教授	瀬戸 義哉
法学部 教授	阪井 和男	経営学部 教授	中澤 高志
商学部 教授	中林 真理子	国際日本学部 教授	萩原 健
商学部 准教授	川口 啓太	学生支援部長	小野寺 幸子
政治経済学部 専任講師	柴田 有祐	学生支援事務長	田中 彰
文学部 教授	落合 弘樹	和泉学生支援事務長	東盛 達也
理工学部 准教授	川崎 章司	生田学生支援事務長	大竹 貞昭
理工学部 准教授	加藤 恵輔	中野教育研究支援事務長	藤嶋 利生

駿河台キャンパスボランティア活動支援分科会

座長(副センター長)	
文学部 准教授	平山 満紀
分科会委員	
商学部 教授	中林 真理子
政治経済学部 専任講師	柴田 有祐
文学部 教授	落合 弘樹
事務局	
学生支援事務長	田中 彰
学生支援事務室	秋山 智美
駿河台ボランティアセンター	大瀧 百恵

和泉キャンパスボランティア活動支援分科会

座長(副センター長)	
情報コミュニケーション学部 専任講師	高橋 華生子
分科会委員	
法学部 教授	阪井 和男
商学部 准教授	川口 啓太
経営学部 教授	中澤 高志
和泉キャンパス課長	石川 恵資
事務局	
和泉学生支援事務長	東盛 達也
和泉学生支援事務室	渡辺 正人
和泉ボランティアセンター	弓長 英明
和泉ボランティアセンター	シンプソン 智子
和泉ボランティアセンター	小林 和子
和泉ボランティアセンター	高橋 真由美

生田キャンパスボランティア活動支援分科会

座長(副センター長)	
農学部 専任講師	伊藤 善一
分科会委員	
理工学部 准教授	川崎 章司
理工学部 准教授	加藤 恵輔
農学部 准教授	瀬戸 義哉
生田キャンパス課	鈴木 幸司
分科会オブザーバー	
理工学部 准教授 (ボランティアセンター担当副学生部長)	池田 有理
事務局	
生田学生支援事務長	大竹 貞昭
生田学生支援事務室	辻 薫
生田ボランティアセンター	藤掛 素子
生田ボランティアセンター	小林 優美子

中野キャンパスボランティア活動支援分科会

座長(副センター長)	
総合数理学部 准教授	渡邊 恵太
分科会委員	
国際日本学部 教授	萩原 健
事務局	
中野教育研究支援事務長	藤嶋 利生
中野教育研究支援事務室	首藤 雅一
中野教育研究支援事務室	稲川 悠介
中野教育研究支援事務室	三澤 祐子

目 次

●活動報告書発刊にあたって（ボランティアセンター長挨拶）	・・・ 1
●2021 年度 ボランティアセンター運営委員会・分科会名簿	・・・ 2
●目次	・・・ 3
●年間活動	・・・ 4-5
●活動報告	
1 副センター長より	・・・ 6-7
2 センターが主催・コーディネートする活動	・・・ 8-52
3 学生の自主的な活動の支援	・・・ 53-73
●資料	
ボランティアセンター来室者数・活動者数	・・・ 74

※2022年3月31日現在の情報を掲載しています。

※明治大学では、「障害」の文字表記を「障がい」として統一しています。ただし、固有名称および感想においては、この限りではありません。

2021年度 明治大学ボランティアセンター年間活動

	駿河台ボランティアセンター	和泉ボランティアセンター
4月		<ul style="list-style-type: none"> 明大生ボランティア丸ごと紹介タイム P23 連続講座「SDGsを知って、私たちにできることを考えよう！」(4月～1月) P34
5月	<ul style="list-style-type: none"> ひとりで考えない恋愛学(5月～12月) P16 災害救援ボランティア講座(5月～6月) P9 	<ul style="list-style-type: none"> 杉並区高齢者との「お茶会」(5月～2月) P39
6月	<ul style="list-style-type: none"> 哲学対話(6月～2月) P17 	<ul style="list-style-type: none"> 講演会「復興の道を歩んできた私たちがコロナ禍の大学生に伝えたいこと」 P10
7月	<ul style="list-style-type: none"> 防災ワークショップ P8 	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動支援分科会 二階堂高校「ボランティア入門講座」体験談発表 P42 全商品リサイクル活動(サークル MIFO) P61
8月	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動支援分科会 	<ul style="list-style-type: none"> 講座「いま、知っておきたい災害ボランティアのこと」 P11
9月		
10月	<ul style="list-style-type: none"> MIW 祭り(学生団体 Tree) P53 明大祭におけるエコキャップ活動(Tree) P56 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> 災害救援ボランティア講座 P9 千代田区一斉清掃の日(Tree) P59 エコキャップ袋詰め(Tree) P55 華を楽しむ会(Tree) P64 	<ul style="list-style-type: none"> フリーマーケット活動(サークル MIFO) P62
12月	<ul style="list-style-type: none"> エコキャップ業者引き渡し(Tree) P55 防災ワークショップ P8 Tree 総会(Tree) P65 学生ネット交流会(Tree) P65 さくらキッズとの交流会(Tree) P64 	<ul style="list-style-type: none"> 竹とんぼ教室 P41
1月	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動支援分科会 	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動支援分科会
2月		
3月	<ul style="list-style-type: none"> オンライン de 対話しよう P19 	<ul style="list-style-type: none"> ボラ FES(ボランティア学生交流会) P24
通年	<ul style="list-style-type: none"> エコキャップ回収(Tree) P54 	<ul style="list-style-type: none"> SNS を通じた情報発信 明大前駅周辺清掃活動(サークルぱれっと) P60 エコキャップ回収①(サークルぱれっと) P57
4キャンパス合同	<ul style="list-style-type: none"> オンライン版 あすチャレ! Academy(5月) P12 3大学連携オンライン講座(9月) P13 4キャンパス合同オンライン開室(4月～7月・9月～1月) P21 	

生田ボランティアセンター		中野ボランティアセンター		
• ボランティア相談会	P21			4月
		• 手話カフェ (5月～7月)	P14	5月
		• 韓国語教室 (5月～7月)	P27	
		• 中国語教室 (5月～7月)	P29	
		• 日本語教室 (5月～7月)	P32	
		• 英語教室 (5月～7月)	P33	
• 科学博士になろう① (6月、10月)	P44			6月
• 明治 2020@ikuta プログラム (6月～3月)	P36			
• ボランティア相談会	P21	• エコキャップ回収② (サークルぱれっと)	P58	7月
• ボランティア活動支援分科会		• みんなで創る「せいり」トーク	P37	
• 科学教室の実験テーマ創り (8月～2月)	P46			8月
		• ボランティア活動支援分科会		9月
• キワニスドール作り (10月～12月)	P50	• 清掃活動 (10月～11月)	P51	10月
• ボランティア相談会	P21			
• 昼やすみ学生トーク! (11月～12月)	P25	• 手話カフェ (11月・1月)	P14	11月
• エネルギー環境ワークショップへの出展 (サークル SHIP、LINKs)	P63	• 韓国語教室 (11月～12月)	P27	
• 科学博士になろう② (11月～3月)	P47	• 中国語教室 (11月～12月)	P29	
		• 日本語教室 (11月～12月)	P32	
				12月
• ボランティア活動支援分科会				1月
		• ボランティア活動支援分科会		2月
• オンライン de 対話しよう	P19			3月
• 公式 SNS で発信	P22			通年
• ボランティアセンター運営委員会 (年2回)				4キャンパス 合同
• オンライン団体登録 (通年)				
• 災害復興ボランティア活動に対する助成金 (通年)				

副センター長より

オンラインでできる活動の模索を続けた 2021 年度

平山 満紀 ボランティア副センター長
(駿河台担当、文学部准教授)

コロナ禍 2 年目。学生・教職員は、大学生生活のオンライン化に慣れて、前年度のような混乱は減ったようでした。しかし、友人とのつきあいや新しい出会いを栄養として求める学生たちが、栄養不足で干からび弱ってしまっている姿も、数多く見うけられました。どのようにこの苦しさを軽くできるかが、ボランティアセンターの課題となりました。

コロナ禍での新たなニーズに応える、学生からの新規企画の応援を、駿河台ボランティアセンターは心がけてきました。しかし結果として、新しい企画は、「哲学カフェ」が意義深い対話の場を作り出していたほかは、多くありませんでした。新しい活動を立ち上げるのにも、学生同士が自由に話し合える機会が必要なのに、その機会自体がなかったからかもしれません。すると、その機会を提供することを、ボランティアセンターがしなければならなかったのかもしれない。今さらながら、反省しているところです。

一方、コロナ禍でのオンライン活用で、大きく進展した活動もありました。「防災ワークショップ」は、昨年度はオンライン開催にして、他キャンパスからの参加が可能になりましたが、今年度はさらに、関西も含め他大学からご熱心な参加者を得ることができました。講演会やワークショップなどは、オンライン開催の利点が大きいとわかりました。

これらの模索を貴重な経験としてかかえつつ、対面活動ができるようになった有難さをいま身体いっぱい感じています。

バーチャルとフィジカルをつなぐボランティアセンターの役割

高橋 華生子 ボランティア副センター長
(和泉担当、情報コミュニケーション学部専任講師)

新型コロナウイルスの影響が長引くなか、以前であれば「制約」と捉えられていたことが常態化しつつあります。大学も例に漏れず、授業や会議などをオンラインで実施するなど、非接触型の取り組みが積極的に導入されています。そのような新しい可能性が開拓される一方で、なかなか停滞の状態から抜け出せないものもあります。その一つがボランティア活動です。

昨年の報告書にも書いたように、多くのボランティア活動は「物理的な場」を必要とします。情報を入手する場、経験を積む場、得られた知見を共有する場など、一連の流れのなかには実にさまざまな場が存在し、そうした場を介して有機的に広がっていくのがボランティア活動の醍醐味だといえます。確かに、オンライン上のバーチャルな場でも、できることがあるのは否めません。しかし、この1年間でさらに強まったのは、やはり「物理的な場」の重要性であると感じています。

2021 年度は有志の方々とともにオンラインでできることを模索し、連続講座やイベントなどを開いて、一人でも多くの学生にリーチしようと試みました。少数ながらも意識の高い学生に出会えたのは貴重な成果であったものの、アクセスしやすいけれども離れやすいというバーチャルな場の特性ゆえに、学生の持続的な参加を担保することが難しかったといえます。

今後の課題は、バーチャルとフィジカルをつないでいくことだと考えています。つまり、オンラインでの取り組みを通じて関心のある学生を掘り起こしていく、同時にかねがが実際に協働できる物理的な場を提供し、「続かせる」環境づくりを進めていく。学生や他キャンパスのセンターとともに、そのための案や策を探っていきたいと思えます。

「体験型」ボランティア活動の復活

伊藤 善一 ボランティア副センター長
(生田担当、農学部専任講師)

生田ボランティアセンター（生田VC）は、農学部、理工学部のある生田キャンパスに設置されています。これまで、生田VCでは、理系の学生が学ぶキャンパスということもあり、「サイエンス」と「自然」を主なテーマとして、「災害復興」、「環境」、「子ども」、「地域」、「国際」、「福祉」などのテーマについても、多くの学生が主体的に参加し、幅広いボランティア活動を行ってきました。

2021年度も、新型コロナウイルスの影響により、ボランティア活動が制限される状況が多くありました。そのような状況の中でも、「ボランティア活動をしたい」という学生たちからの熱い要望をうけて、状況をみながら感染対策には十分留意して、一部のボランティア活動は対面で実施することができました。

内容によっては、オンラインでも実施できるボランティアもありますが、生田VCで実施してきた「こども科学教室」、「ハロー！ Agriculture！プログラム（黒川農場での農業体験）」、「生田緑地ホテル観察会」等は、やはり対面で参加して、実際に現地に赴き、「体験」することに価値があると考えます。今後、従来どおりの対面で実施するボランティア活動が増えることを願っております。

今後も生田VCの活動をさらに発展させていきたいと思っております。皆様のご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

地域連携と異文化交流を柱として

渡邊 恵太 ボランティア副センター長
(中野担当、総合数理学部准教授)

「国際化」「先端研究」「社会連携」をコンセプトとする中野キャンパス（国際日本学部、総合数理学部）は、キリングroup本社をはじめとする大手企業や中野区の行政機関、そして帝京平成大学と早稲田大学などの教育機関があり、国際色豊かなだけでなく、隣接する四季の森公園の一部と言えるほど地域と一体化した場所です。住民やビジネスパーソンら様々な人々が集い、交流する土地柄があります。

新型コロナウイルス感染症の蔓延以前、キャンパスの1階エントランスや学生食堂は、地域住民にも親しまれて参りました。そうした地域性や土地柄を活用し、防災ワークショップなどの取り組みや、学部特性を生かして実施している中国語、韓国語、英語、日本語の語学教室（講師は学生ボランティア）は好評を得ています。対面での活動が自粛されたコロナ禍であっても、一部はオンラインでの活動も開始し、地域と連携した取り組みなど、創意工夫により新展開を迎えています。

中野ボランティアセンターの活動は、日本社会において現在まさに求められているものと言えます。今後とも、一層活動の拡充を図り、学生の成長に寄与するとともに社会からの要請に応えていく所存です。

防災・復興

防災ワークショップ 駿河台

2014年度から駿河台キャンパスで実施している企画で、学生や教職員の防災意識を高めることを目的に年1～2回開催しています。2021年度は初めて、オンラインで開催しました。

日時	方法	参加
2021年 7月15日(木) 17:10～18:50	Zoom	明大生 11名
2021年 12月14日(火) 17:10～18:50	Zoom	明大生 16名 他大生 3名 教職員 9名

内容

- ・講義「どう避難する？災害と新型コロナ」 ※7月15日
- ・講義「首都直下地震と新型コロナ～帰宅困難に備えよう～」 ※12月14日

切迫する首都直下地震の想定震度や、コロナ禍での避難対策について学ぶ。そして、地震発生時の明治大学各キャンパスで起こり得る被災状況を想定した「帰宅困難対策 with コロナ」のワークショップを行う。大学で被災した場合の帰宅方法について・帰宅困難時の過ごし方や対策、さらにはコロナ禍ならではの対策について各自考え、その後、グループで意見や提案を出し合い、グループ発表し、情報共有する。

講師

小林 一樹(明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員、東京都立大学 名誉教授)



▲ポスター

参加者の声



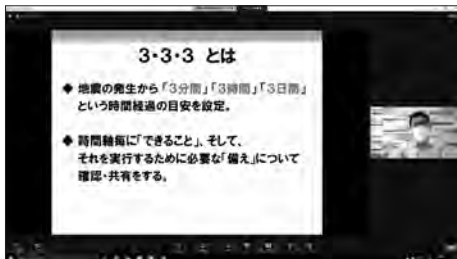
- ・最悪の状況とはどのような状況なのか、またどれくらい起こりうる可能性があるのかを把握し、その上で自分はどのように対応するのかを話すことができたので、とてもためになりました。
- ・ハザードマップを確認したことで無闇に避難するより自宅にいるべきことがわかったり、家に常備すべきものを把握したりすることができました。今度は、外出時にどう避難したら良いかなども考えたいと思いました。
- ・もし災害が起こった時に、自分には何が足りていないのかを明確に知ることができました。また、コロナ禍の避難に関しては在宅避難の選択肢もあるというお話の中で、自分がその立場になったときに、家にいるべきなのか、それとも避難所に行くべきなのかどちらかを選択するのは難しいと感じたため、事前にハザードマップなどで自宅の状況を調べておこうと思いました。
- ・本日はコロナと災害の二つに対してどう対応していくかという事で、自分の意見以外にもあらゆる角度からの意見があり、非常に興味深く感じました。災害が起きたときに気が動転せず、冷静に行動できるように事前準備をしっかりしていきたいと思いました。

災害救援ボランティア講座 駿河台

千代田区大規模災害時における協力体制に関する基本協定に基づき、2005年度から実施している千代田区助成事業です。千代田区と大学の災害時の協力体制を確かなものとしていくための学生ボランティアの養成を目的として実施しています。全3日間のカリキュラム修了者には、「セーフティリーダー認定証」および「上級救命技能認定証」が交付されます。

春学期は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための明治大学活動制限指針により、オンラインによる2日間の開催となり、上級救命技能講習が実施できず、「セーフティリーダー認定証」のみが交付されました。

日時	春学期：2021年5月29日(土)・6月5日(土) 9:00～16:40 ※2日間に短縮してオンライン実施 秋学期：2021年11月6日(土)・13日(土)・20日(土) 9:00～17:00
方法	Zoom(春学期)
場所	駿河台キャンパス内教室およびスポーツルーム、東京消防庁本所防災館(秋学期)
内容	消防実務・ボランティア有識者による講義・演習、本所防災館での災害模擬体験、上級救命技能講習などの実技を3日間通して学ぶ。(春学期は実技なしの全2日間オンライン開催)
協力	災害救援ボランティア推進委員会
後援	総務省消防庁、NHK
受講	春学期：18名 秋学期：20名 累計受講者 800名(2005～2021年度)



▲春学期オンライン講座の様子①



▲春学期オンライン講座の様子②



▲秋学期講義の様子



▲本所防災館(地震体験の様子)



▲秋学期救命講習



▲グループワークの様子

講演会「復興の道を歩んできた私たちがコロナ禍の大学生に伝えたいこと」和泉

和泉ボランティアセンターでは、コロナ禍での取り組みについて、関係教職員で意見交換を重ねてきました。その中で、震災後に女性たちの縫製の能力を生かしてミシン工房を立ち上げ、単なる物質支援にとどまらない、被災した女性たちの心の拠り所となる場をつくった団体があると知りました。東日本大震災から10年が経ち、東北に行きたいが行けない学生や、これまで継続してきた活動の中止を余儀なくされているサークルも多くあります。オンラインでも現地とつながる機会を持ちたい、何か学生の能力や思いを生かした活動のヒントを見つけてほしい、との思いから企画に至りました。

当日は、和泉キャンパスの学生をはじめ、他キャンパスの学部生や大学院生、教職員など幅広い層の参加がありました。講演後の質疑応答では「現地の人とのコミュニケーションの工夫は」「続けるために必要なことは」「どうしてミシンを選んだのか」など、予定時間を超過するほど続々と質問が寄せられました。講師の熊谷さんからは、団体の立ち上げやコロナ禍にまつわる苦労話とともに、楽しくやることや真面目になりすぎないこと、弱さも含めて自分をさらけ出すことの大切さや、現地でのニーズや活動についてのアドバイスなど、なかなか現地に足を運ぶことのできない学生にとって前向きなメッセージや情報をたくさんいただきました。

講演後には早速、東日本大震災の被災地で活動を続けてきた本学の公認サークルから、ホームカミングデーなどでの商品紹介・販売など、何か一緒に出来る活動を模索したいとの申し出があり、直接のやりとりをしてもらうことになりました。今後の活動が楽しみです。



▲南三陸ミシン工房講演会チラシ

日時	2021年6月4日(金) 12:40～14:20
方法	Zoom(事前申し込み者に限り、アーカイブ視聴を可能とした)
参加	学生40名(うちアーカイブ視聴7名)、教職員14名
講師	熊谷安利氏(南三陸ミシン工房)
内容	震災後の町の様子、南三陸ミシン工房の取り組みや現在までの歩み、参加者との質疑応答 など



▲講演会の様子

講座「いま、知っておきたい災害ボランティアのこと」和泉

毎年、多くの地域で豪雨による土砂崩れや河川の氾濫などの甚大な被害が報告されている中、今後現地でボランティア活動の意欲があり、知識をつけたい本学の学生を対象に、被災地支援ボランティア活動に関するオンライン講座を開催しました。

講座では、2名の災害支援のスペシャリストを講師としてお迎えし、コロナ禍における災害ボランティア活動の基本についてお聞きした後、少人数に分かれてグループワークと意見交換を行い、ボランティア活動参加への意識を高め合いました。緊急事態宣言下での開催で、ボランティア活動を含む対面での課外活動はできませんでしたが、学生の講座に対する積極的な姿勢がとても印象的でした。

例年、夏季休業期間は学生にとって、被災地支援ボランティア活動に参加しやすい時期です。今後も学生のニーズにあわせ、開催を検討したいと思います。



▲チラシ

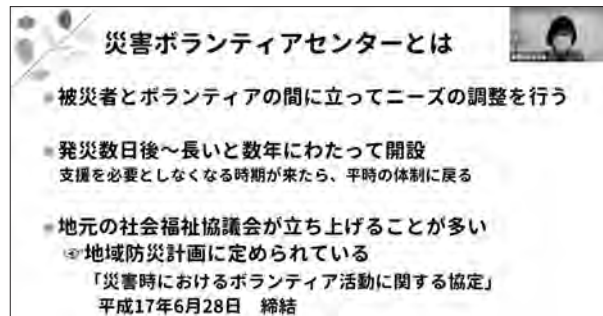
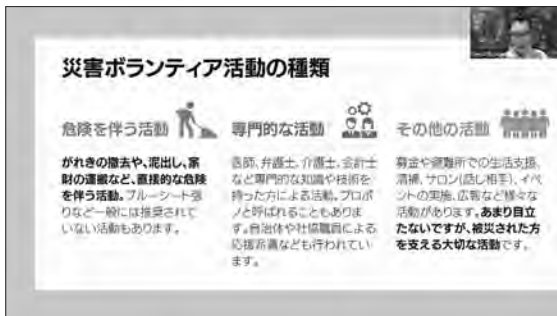
日 時 2021年8月3日(火) 14:00～15:30

内 容 ①災害支援に重要な役割を担う災害ボランティアセンターについて
②災害ボランティア活動の情報収集、準備、心構え、必要な装備や衛生管理について
③グループワーク、意見交換、質疑応答

方 法 Zoom(事前申し込み者に限り、アーカイブ視聴を可能とした)

参 加 学生33名、職員7名、関係者4名、アーカイブ視聴5名

講 師 坂西 千笑氏(杉並区社会福祉協議会 杉並ボランティアセンター)
宮崎 賢哉氏(災害支援・防災教育コーディネーター、社会福祉士)



▲講座の様子

オンライン版「あすチャレ! Academy」開催 **駿河台 和泉 生田 中野**

現役パラアスリートによるダイバーシティ研修を行いました。グループワークや講師の山本さんの体験談、スタッフの方のロールプレイや質問タイムなど形式を変えながら笑顔を交えた楽しい研修が行われました。

日時	2021年5月13日(木) 12:40～13:20
方法	Zoom
参加	31名
講師	山本 恵理 氏(パラ・パワーリフティング アスリート)
プログラム提供	日本財団パラリンピックサポートセンター
協力	日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo)

終了後アンケートより



山本さんの仰っていた、「障がいをなくすために必要なことが選択肢を増やすこと」という解釈がとても素敵な言葉だと思い、印象深かったです。私もその考え方を自分の中に吸収したいと思いました。

参加者の声



商学部3年 大和田 優希

「あすチャレ! Academy」ではパラアスリートの山本恵理さんがわかりやすく説明してくださいました!

障がいをもつ方の生きづらさや実際に助かる声かけなどを教えて下さいました。

下肢障害の方は足のプッシュ型消毒液を利用することができない、狭い店内には入ることができない、段差のない温泉のはずなのに車椅子で脱衣所に入っはいけない、など日常の中で私には気づきづらい生きづらさや理不尽な事を知りました。

アルバイトや通学途中でお声をかけるか悩んだ過去がありましたが、今回正しい知識を得ることができたので次回から見かけたら声をかけてみようと思います!

またこの研修では障がいについて知ると同時に参加者自身の生きづらさと向き合い挑戦する気持ちにもさせてくれます。「明日へのチャレンジ」というこの研修名の由来にも表れていますよね!身体的な不自由を感じることは少ないかもしれませんが精神的不自由はすべての人が感じ、皆何かしら努力や挑戦をして生きているのだと思うことができました。

この研修を経て生きやすい世の中は私達一人ひとりの行動や意識から始まると改めて感じました。内容面でも雰囲気面でも参加してよかったと感じています。少しでも興味があれば参加してみてください!



▲みんなの明日チャレンジしたいこと

3大学オンライン講座 **駿河台 和泉 生田 中野** 「琵琶湖の環境保全 – 琵琶湖ツーリズム！大学生で考える環境ボランティアの未来–」（関西・法政・明治3大学連携事業）

関西大学ボランティアセンターが企画していた3大学連携事業「琵琶湖岸での外来水生植物の駆除活動」が、新型コロナウイルスの影響により、延期となったため、代替企画として、オンライン講座が実施されることとなりました。

日時 2021年9月15日(水) 13:00～15:00

方法 Zoom

主催 関西大学ボランティアセンター（関西・法政・明治3大学連携事業）

参加 明大生18名、明大職員1名

目的 専門家の講義により、琵琶湖の環境保全、特定外来生物、及び、駆除活動の概要・心構えなどについて学ぶとともに、3大学の学生同士の交流の場を持つことにより、今後の3大学連携活動の一助とする。

内容

- ・琵琶湖環境保全活動の概要説明(関西大学ボランティア学生スタッフ)
- ・琵琶湖の環境保全の現状と課題についての講演(中井 克樹 氏)
- ・質問タイム
- ・意見交換会

講師 中井 克樹 氏(滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課 / 滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員)



感想

- ・外来生物をどのように駆除し、それをどのように処分するのか、またそれに伴う問題点について詳しく知ることができてよかった。人力による駆除も重要であることは知らなかった。中井さんのお話はどれも興味深く、特に外来種だからいけないのではなく「影響を放置できるか」という点が重要であるとは知らなかったため、良い勉強になりました。
- ・中井先生のお話を聞く中で、琵琶湖を取り巻く環境問題が徐々に身近に感じられていきました。環境を改善していくために自分にできることは何か、どうすれば効果的な力になれるのかを考えることができ、これらの問題を考えるうえで必要な知識を得られたので、次は行動だと思っています！



▲オンライン講座の様子

手話カフェ 中野

2021年度の手話カフェは、春学期はオンラインで、秋学期は対面での開催となりました。

写真や言葉だけでは伝わりにくい手話表現をより伝わりやすくするために、春学期の資料は動画を使用し、受講学生にとっても好評でした。企画学生の創意工夫が素晴らしく、参加している学生にいかにも楽しんでもらえるか、どうすれば続けて教室に足を運んでもらえるかを懸命に考えることで、学生自身の達成感に繋がるなど、その成果がとても効果的に表れていました。

秋学期の手話カフェは大学の活動制限レベルが下がったタイミングで対面開催することができました。

11月は和泉キャンパスで昼休みに開催、1月は中野キャンパスで4日間連続開催し、どちらも昼休み中の約30分の時間でコンパクトに開催しました。秋学期は対面で手話を学べることのメリットを伝えるため、1対1の対面で行う挨拶と、教室に入ってきた時に全員に向けてする(される)挨拶をそれぞれ行ってみたり、ジェスチャーでボール投げを行ってみたりすることで、手話を行う際には相手の目を見ること、距離を測りながら表現することの重要性を体験しました。

春学期のオンライン開催時の手話を伝えるための工夫や経験を踏まえて、対面で手話を学ぶ際の利点をしっかりと伝えることができた企画になりました。

方法

<春学期> Zoom

<秋学期> 対面(11月・和泉キャンパス、1月・中野キャンパス)

内容

<春学期> 手話のあいさつと指文字/自己紹介をしてみよう/手話で注文してみよう/手話の数字の表現(日付・年齢)/手話の数字の表現(個数・時間)/手話の時間軸の表し方/自己紹介と趣味/まとめ・手話クイズ

<秋学期> 指文字、手話の自己紹介挨拶 対面で距離を図りながら手話をしてみよう/継続して手話で会話をしてみよう

<春学期>

日時	回数	講師学生	参加
2021年5月13日(木)～7月15日(木) 12:35～13:25	8回	4名	105名

<秋学期>

日時	回数	講師学生	参加
2021年11月30日(火) 2022年1月11日(火)～1月14日(金) 12:30～13:25	5回	2名	2名

講師学生の声



総合数理学部4年 大塚 拓海

春学期は教える面での試行錯誤ができました。資料はZoomの講座内容に合わせて事前に編集した動画を盛り込むなどして、パソコン画面上で見やすい手話を意識しました。また、スタッフとの交流を意識して会話文を交互にするなど会話に近い形式で手話を使いました。

手話でのコミュニケーションはお互いの顔が見えた方がやりやすいですが、オンラインだとカメラの都合で立体的な手話の動きを真似することが難しいです。しかしオンラインで手話を教えるのは資料作りや、毎週の準備など大変でしたが自分の手話の上達にもなり、とてもいい経験になりました。

秋学期は対面で行いました。対面だと参加者が自己紹介の仕方や、指文字などもすぐに理解してくれて、手話の形や、相手の反応が見やすく会話も楽しくでき、オンラインでやるよりも大きな手応えを得ることができました。オンラインでたくさん講座をやってきた経験が生きていると感じました。

スタッフの学生さんがいたので教える分担もでき、一人で教えるよりも安心感があり楽しかったです。指文字の教え方が丁寧で上手くなっていて、初めの頃よりも手話が上達していて感慨深く感じました。

1月は、4日間連続で昼休みに開催することにしました。自分が手話を身につけた経験を振り返ると、手話を勉強するというよりみんなと話をするのが楽しくて自然と身についたので、時間は短くてもいいから継続し、内容もあまり決めずにその場で集まった人で話をする方針にして開催しました。

学生の参加者は少なかったですが、手話を集中して話せたことは自分にとってもいい経験になりました。

継続することと会話が楽しいことはやはり手話の学習に効果があると思います。

時間を短く設定するのは、無理なく継続できるやり方だと思います。対面活動ができるようになったら、ぜひもっと長い期間継続してみたいと思います。



▲覚えた数字の指文字でゲームを行う様子



▲復習時間も設けることで途中参加者にも丁寧でわかりやすい内容となりました



▲自己紹介で自分の名前を伝える

ひとりで考えない恋愛学 駿河台

新型コロナの影響で友だちと直接話す機会が減り、恋愛や性についてひとりで考え込んでいる学生のために、有志学生の自主企画として開催している講座です。

2021年度はZoomと対面方式の両方を用いて、学生スタッフが中心となり、コーディネーターの担当教員のサポートのもと開催しました。

- 日時** 2021年5月10日(月)～2021年12月21日(火) 全9回
- 方法** Zoom ※12月21日(火)のみ、駿河台キャンパス内教室
- 内容** 学生が中心となり、性や恋愛のテーマを決め、オンライン・対面による勉強・意見交換の場の企画・運営を行った。
- コーディネーター** 平山 満紀(文学部准教授、副センター長)
パッハー, アリス ルイーゼ(文学部助教)

日時	テーマ	参加
① 2021年5月10日(月)	「みんなで話そう！恋愛のギモン」	学生 23名 教職員 2名
② 2021年5月24日(月)		学生 22名 教職員 2名
③ 2021年6月14日(月)	「恋愛は楽しい？ めんどくさい？」	学生 15名 教職員 4名
④ 2021年6月28日(月)		学生 10名 教職員 2名
⑤ 2021年8月27日(金)	「夏休み恋愛相談会」	学生 11名 教職員 2名
⑥ 2021年9月10日(月)		学生 10名 教職員 2名
⑦ 2021年10月18日(月)	「距離の取り方・縮め方」	学生 9名 教職員 1名
⑧ 2021年10月25日(月)		学生 2名 教職員 2名
⑨ 2021年12月21日(火)	「恋愛に関するグループディスカッション」	学生 9名 教職員 2名

実施しての感想



商学部3年 太田 芽衣
個人の恋愛観についてグループだけではなく全体でも積極的に意見をしてくれる参加者が多かった。中には、全体に向けて質問(性的マイノリティーについて自己紹介の時に公表すべきかどうか)を投げかけてくれた参加者もいて刺激的だった。

また、コロナによって恋愛の仕方が変化したかどうか(マッチングアプリに対する考え方)について、参加者それぞれが意見をもって話し合えたので楽しかった。

スタッフ内でのミーティングでは宣言が明けたことに伴い今後の活動について改めて検討すべき点(対面活動をする場合どこの校舎で行うか・Zoom開催は継続したほうがいいのか・恋愛お悩み相談会という時間を設けてもいいのではないか)が挙げられたので考えていきたいと思う。

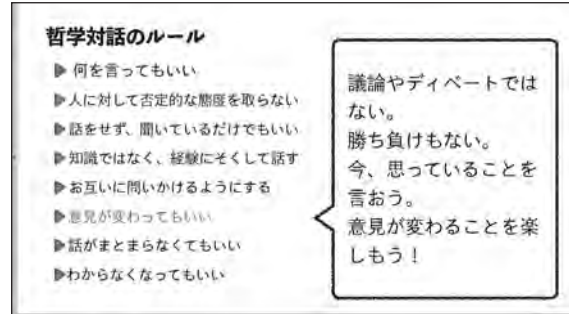
哲学対話 駿河台

コロナ禍の中、人と話せない状況が続き、自分の考えていることを誰かと共有することができず不安に感じている学生が多いことを考え、新たなつながりの場を作ることを目的に、有志の学生が「哲学対話」を企画し開催しました。

哲学対話とは、哲学の専門的な知識を必要とせず、参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていく対話手法です。

ルールは

1. 何を言ってもいい
 2. 人に対して否定的な態度を取らない
 3. 話をせず聞いているだけでもいい
 4. お互いに問いかけるようにする
 5. 知識ではなく自分の経験に則して話す
- このルールに従いながら話をしていきます。



▲哲学対話のルール

哲学対話では、対話中に話をまとめたり、考えを主張して誰かに押し付けたりしないため、色々な人の意見を聞いたり考えたりすることができ、お互いの考えを理解し合いやすくなります。

あくまでも話の方向性や理解は参加者の主体性に委ねられるため、それぞれを受け止め合える対話の場となり、毎回充実した内容となりました。

日時 2021年6月2日(水)～2021年2月18日(金)

方法 Zoom(※12月13日のみ、明治大学博物館内で対面開催)

参加 学生41名、職員11名

日時	テーマ	参加
① 2021年6月2日(水) 13:30～15:00	男から見たら女はうざいですか、 女から見たら男はうざいですか	学生12名、教職員2名
② 2021年8月19日(木) 10:00～12:00	お金	学生2名、教職員4名
③ 2021年9月14日(火) 10:00～12:00	協調性のない他人とどう付き合うか	学生11名、職員2名
④ 2021年12月13日(月) 13:30～15:10	博物館で、歩いて考えよう！哲学ウォーク	学生9名
⑤ 2022年2月18日(金) 10:00～12:00	家族にパートナーや結婚を求められること/ SNSとリアルのパーソナリティについて	学生7名、職員3名

企画者の声



総合数理学部4年 大塚 拓海
哲学対話では、一つのテーマをもとに話すのですが、そのテーマをどう決めるかを毎回考えてしまいます。

例えば、テーマを出すために「考えがある人、いますか？」と参加者に聞いても、まずテーマらしきものは返ってきません。考えていたとしても初めて会う人に、自分の考えを共有することはとても勇気がいることだからです。しかし、自分だけが考えていると思っていたことをみんなで考えることができるのが哲学対話の醍醐味でもあります。

そこで、アイスブレイクをして、それをもとにテーマをみんなで作っていきやり方を採用しました。まず参加者に、それぞれ「愚痴」を紙に書いて見せてもらいます。それをもとに、考えなくなったことをチャットに書いてもらい、投票で多かったものを当日の問いにすることにしました。

愚痴については、その人の言っても仕方がないこと(例えば、頭が痛い、他人のこと、自分しか問題と思っていないこと)が現れます。仕方がないことだからこそ、その問いを他人と共有したときの驚きが大きくなると思ったのです。

テーマは「協調性のない他人とどう付き合うか」に決まりました。自分にとってどうすることもできない「他人」を扱うテーマは、愚痴から始まった哲学対話に相応しいと思いました。

他人との付き合い方、また「協調性」という言葉に対するそもそもの疑問など、さまざまな角度から意見が出ました。さらによかったのは、それぞれの他人との付き合い方の違いを「なぜそういう付き合い方をするのか」とお互いに問いかけあったことです。リーダーシップを取る方がいいと考える人、合わない人は合わない割り切る人、それぞれの違いを明確にしつつ、それでも対等に考えを並べていくのはまさに対話をしている感じがしました。

最後の方で、「どうしようもない他人と、それでもコミュニティや人間関係を結び続けるのはなぜか？」と根本的な問いも提示されました。その段階で、対話がさまざまな意見を通して深まっていること、その問いが対話に参加した人たちそれぞれの間で共有されていたことを実感することができました。それぞれの個性を保ちつつ、対話の場としての一体感を生むことができる哲学対話の醍醐味を感じられる会になりました。



▲第1回目は「男から見たら女はうざいですか、女から見たら男はうざいですか」という刺激的なテーマについて対話しました



▲第4回哲学ウォークの様子
(明治大学博物館内を歩きながら対話)



▲第4回哲学ウォークの様子
(博物館内を見学後みんなで対話)

オンライン de 対話しよう！ 駿河台 生田

たまたま集う人達で、話したり考えを深めたりする「対話」の場を、オンラインで試行的に開きました。

対話にはさまざまな手法がありますが、今回とりあげたのは哲学対話と鑑賞型対話の2つの手法です。これらの手法を体感するとともに、手法の発展や対話そのものの可能性についてさぐりました。また、ファシリテーター役を変えていくリレー方式も試しました。

対話は、人がフラットに問いや思考を重ね合わせる行為です。重ね合いは、自らの思考を深め、貢献感をうみだします。居場所をつくり、活動が発展し、生活が豊かになっていくきっかけにもなります。その試行錯誤をこれからも続けていきたいと考えています。

日時 2022年3月10日(木)、17日(木)、24日(木) 全3回

方法 Zoom

参加 学生21名 職員7名

内容 オンライン対話のさまざまな形を試す

日時	テーマ	対話の手法	ファシリテーター	参加
① 2022年3月10日(木) 10:00～12:00	アート×対話 アートをみながら対話しませんか	鑑賞型対話	職員	学生6名 職員2名
② 2022年3月17日(木) 10:00～12:00	「仲間」「チーム」って？ 「友達」「親友」って？	哲学対話 (テーマ有)	学生	学生9名 職員3名
③ 2022年3月24日(木) 10:00～12:00	その場で考えたいことを考える	哲学対話 (テーマフリー)	学生	学生6名 職員2名

運営者の声



第1回「アート×対話」の回について

ボランティアセンター職員のファシリテーションでアート鑑賞のワークショップが始まった。3月のオンラインの対話型企画の第一弾ということで、これからオンラインでもさまざまな学生同士の交流を試していくつもりだった。

初めは、ゴッホのひまわりの絵を一分鑑賞した。「一分」と時間を決めて絵を見たことがないので、気が引き締まった。ただ「鑑賞してください」と言われただけなので、どこをみるかは自由だ。時間が限られているので、自分が気になるままに絵画に目を通した。

一分が経過後、「このひまわり、何本あったでしょうか？」と質問されて答えられずハッとした。ひまわりの形は見ていたけど、本数は数えなかったなあ、と思いながら「実はひまわりは15本ある」と教えてもらった。その次は、「15本のうち、自分はどのひまわりだと思いますか？」という質問のもと、自己紹介をした。「端っこにいるけど、まだ枯れていない」とか「なんだか人に支えられて立っている」とか「ちょっと変わっている」とかひまわりそれぞれの表情に自分を重ね合わせて話すと、いつもとは違う一面を自己紹介できた気がした。

その後、本格的な鑑賞をしていった。絵のタイトルを知らないまま、自分が見たこと、疑問に思ったことを口に出していく。絵画の中で起こっていることや、絵が持つさまざまな意味が浮かび上がってくるようだった。二つの絵画をそれぞれ三十分ぐらいかけて鑑賞した。自分が気が付かなかったことや、自分以外の人を受け取った意味も併せて味わうことができた。それだけでも、一人で絵を見るより豊かな体験ができた。

第3回「テーマフリー哲学対話」の回について

自分がファシリテーターということもあり哲学対話の面白いところである、いろいろな人の意見が混ざり合うような対話にしようと思った。

いきなり「話してください」と言っても話をすることができないので、哲学対話で大事な、問いかけ合うことを元にアイスブレイクをした。

総合数理学部4年 大塚 拓海

まず最初の質問は、「自分を野菜か果物にたとえると何？」だった。これを参加者の人に聞いていくと、「スイカが大好きだからとにかくスイカ」とか、「見た目で言ったらごぼう」とかそれぞれがバラバラに自分を紹介していくいいアイスブレイクになった。普通は考えない問いかけに答えることで、話すハードルを下げることができた。

それから、Zoomの画面上にいるメンバーに自分で考えた問いかけを実際に行ってみることもした。すると、「今自分が問題に思っていること」「生まれ変わったら何になりたいか」「暇な時に何をするか」「自分が見た夢でよく覚えているものは」など、多彩な問いかけが生まれた。

そうして哲学対話のテーマを募集すると、自分や個性について、社会における正しさやそうでないことの違いについてなどを問いかけることができた。それぞれの問いが結びつく様子だけではなく、「自分の平凡なところは何か？」などテーマの裏側にあるような問いかけも対話に出てきて一人では考えられないことを考えられたような気がした。



▲第2回「仲間」「友人」って？

4キャンパス合同によるオンライン開室 駿河台 和泉 生田 中野

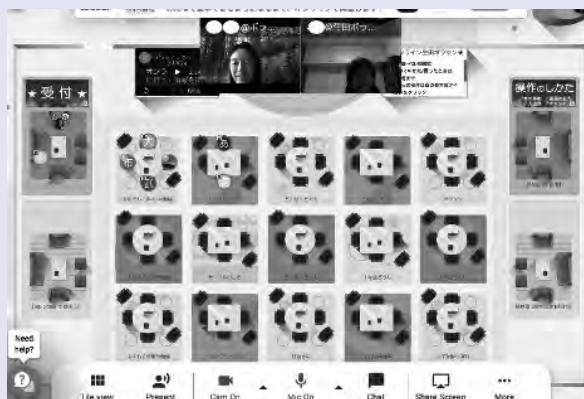
2020年度に引き続き、2021年度も4キャンパスボランティアセンターによる合同のオンライン開室を行いました。予約・申込不要で気軽に来室ができ、ボランティアに関する相談、情報交換のほか、キャンパスや学部を超えた明大生同士の交流を促すことが出来ました。

日時 2021年4月8日(木)
～2022年1月26日(水)
全76日
12:30～13:30

方法 Remo

参加 132名

協力 日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo)



▲オンライン開室の様子

ボランティア相談会 生田

センターの存在を学生に知ってもらうきっかけ作りとして、長期休みを中心にボランティア情報を多数紹介し、計画を立ててもらおう相談会を4月、7月、10月にひらきました。日にちを決めて都合の良い時間にきてもらうようにしたところ、いろいろな時間帯に多くの来室がありました。

センターは常時開室して学生のボランティアの相談にのっています。しかし、いつも開いていると逆に、開いているという情報を学生に伝えるすべが意外と無いものです。そこで、センターがあってボランティア相談にのっていることを伝えるために、期間を区切り相談会と名付け、具体的なボランティア例とともに学内ネットで周知すると、はじめて来室する学生、なんとなくボランティアをしてみたいがどんなボランティアがあるのかわからないので知りたい、という学生が多く来室しました。大学活動制限指針に沿って、センターが対面開室しているときは対面で、オンライン開室しているときはオンラインで開催しました。

日時 ① 2021年4月19日(月)～23日(金)、27日(火)
※20日、22日、27日の昼休み…科学教室の体験紹介を併設
② 2021年7月14日(水)～20日(火)、27日(火)、28日(水)、30日(金)
③ 2021年10月25日(月)～28日(木)

場所 生田ボランティアセンター (①、③ ただし4/27は除く)
Zoom(②、4/27)
※センター隣ギャラリー (4/20、4/22 科学教室紹介)

参加 63名 ※うち科学教室紹介17名

内容 学生のニーズを聴き、ボランティア情報を紹介する。一部の日程で昼休みに科学教室プログラムの体験紹介を併設。

公式 SNS で発信

コロナ禍で学生とコミュニケーションをはかるため、公式 Instagram でより一層積極的な発信に努めました。Instagram の不具合の期間は Twitter で対応し SNS による発信が途切れないようにしました。

日時 2021年4月1日～2022年3月31日

内容 公式 Instagram の活用

(1) 開室カレンダーの公開

閉室、開室、オンライン開室と感染状況と大学の指針によって変わっていくボランティアセンターの開室情報をカレンダー形式でこまめに更新した

(2) 学生の社会貢献活動の紹介

活動の写真を、学生の体験談と併せて掲載。カラー写真でより具体的に活動のようすを伝えた

(3) センター主催イベントの告知

イベントポスターを掲載し、主催イベントを広報した

(4) 投稿数のコントロール

読者にじっくり読んでほしいため、投稿は1日1回に控え、少しずつ投稿した

発信 65回(開室カレンダー公開 21、学生の社会貢献活動の紹介 20、その他 24)



▲公式 Instagram

明大生ボランティア丸ごと紹介タイム 和泉

主に1、2年生が通う和泉キャンパスでは、例年、ボランティアに興味のある学生を対象に、明大生が行うボランティア活動や団体を、活動内容や形態を問わず一度に紹介する合同説明会を開催しています。

2020年度は、緊急事態宣言の発令に伴い、オンラインのみでの開催となりましたが、2021年度は、対面とオンラインの両方で開催することが出来ました。対面会場は、コロナウイルスの感染予防のため、例年よりも大きな会場を確保し、空席を設け密を避けましたが、予想を上回る学生の参加があり、両日ほぼ満員となりました。また、活動紹介の様子をZoomで同時配信しました。

2021年度は、新入生はもとより、コロナ禍に入学した2年生にとっても新しい環境でのスタートとなったこともあり、コロナ禍でも何かしたい、学年を問わず何か新しいことを始めたい、という学生の関心の高さがうかがえました。



▲チラシ

日時

- ① 2021年4月16日(金) 12:30～15:10
- ② 2021年4月21日(水) 12:30～15:10

方法

対面とZoom

場所

和泉キャンパス内教室

参加

- ①対面 92名(うち発表者9名)、Zoom24名
- ②対面 62名(うち発表者12名)、Zoom27名



▲熱心に耳を傾ける学生たち

ボラ FES (ボランティア学生交流会) 和泉

ボラ FES は、ボランティアサークルやボランティア活動をする学生が一年の活動を総括すると共に、学生同士の交流や情報交換をする事により、横のつながりを作ることを目的に実施しています。

2021年度は、コロナウイルスの感染対策を十分に取り、2年ぶりに対面での開催が実現しました。ボランティアサークルのみの参加となりました。

公認ボランティアサークルが各々発表した活動報告は、思うように活動できなかった2年間に、それでも学生達が「今できること」を模索し実現してきた活動内容でした。またボランティアに関するクイズをそれぞれサークルで出題し合い、盛り上がりました。コロナ禍の影響で関係が途絶えていたサークル同士が交流する機会になったのではないかと思います。

今後も様々な形でボランティア活動をしている学生たちが、キャンパスや更には団体の枠を超えて交流するための機会のひとつとして、この繋がりを多くの学生に広げていきたいと思っています。

日時 2022年3月30日(水) 13:30～17:00

場所 和泉キャンパス食堂3階 **参加** 学生39名、職員3名

内容 第一部 交流会
第二部 活動報告+クイズ

参加学生の声



文学部1年 木村 文音
明治大学公認のボランティアサークルが9団体あると知る人は意外に少ないと思います。その活動内容は福祉・環境・国際系などと団体ごとに分野は様々です。

今回和泉ボランティアセンターが主催した「ボラ FES」は、対面での開催が2年ぶりとなり、学内の公認ボランティアサークルが一堂に会する年に一度の大型企画となりました。新型コロナウイルスの感染状況の拡大により、各団体でもこの2年間はオンライン活動が主流だったため、本企画には一同がひとかたならぬ期待を寄せていました。

フェスと称するのに相応しく当日は40人程度の参加があり大変賑わっていました。所属団体や学年も違うメンバーが交流する機会はほとんどない為、その意味で本企画は刺激をもたらし、大変有意義なものとなったと思います。

当日は参加者を十数個の班に振り分け、はじめに行ったのは「嘘つき自己紹介」でした。嘘を交えた自己紹介の後、他の参加者がその嘘を当てるゲームで、初対面という事ではじめは緊張の色もありましたが、会話を通し徐々に打ち解けていきました。

また、各団体の活動紹介も行いました。これまで他サークルの活動に関しては知る機会もなく、ただ漠然とイメージするに留まっていたのですが、活動に関するクイズを交えた本企画を通して、共通点や団体独自の内容を理解することができました。

全体を通して当日は頻繁に笑いが起こる和やかな雰囲気でした。他サークルと情報交換や交流ができるこの「ボラ FES」が今後も継続できることを期待しています。



▲交流会の様子



▲集合写真

昼やすみ学生トーク！

大学には、いろんなことを学び、活動し、考えたり、試している学生がたくさんいます。そんな学生たちによるプレゼンや交流のイベントを、2016年度から、授業期間中の昼休みに開催しています。

コロナ禍前は、聴きたい人は申し込みなしで直接センターに来室して、お昼ごはんを食べながらトークを聴くことができました。またトーク後は、参加者が感じたこと、考えたこと、質問などを付箋に書いて、発表者にフィードバックすることが恒例になっていました。コロナ禍の2020年度は対面イベントを企画できなかったため、実験的に1回、完全なオンラインで「トーク」を行いました。

学生の入構制限が解かれた2021年度は、定員をもうけて対面で、あるいは、定員をもうけた対面とオンラインとのハイブリッドで「トーク」を開催しました。対面は、人数制限や飲食禁止等、感染対策を講じて開催しました。

日時 2021年11月17日(水)～2021年12月22日(水)
授業期間の昼休み 12:50～13:20 全9回

場所 生田ボランティアセンター

方法 対面 または 対面とZoomのハイブリッド

参加 99名(担当を含む)

日時	タイトル	担当	方法	参加*
11月17日(水)	サンタさんになってみて考えたこと ～ボランティアは誰のため？	情コミ3年 小笠原 侑美	対面+Zoom	11名 (2)
11月19日(金)	人生に起業という選択肢を！ ～環境問題解決を志す Sustainable な食品ブランドを創出	農4年 池田 航介	対面+Zoom	18名 (6)
11月22日(月)	困っている子どもたちのために ～無料塾を立ち上げてみて～	農 菊水 優太 理工 中田 樹克	対面+Zoom	16名 (3)
12月9日(木) ・10日(金) ・21日(火)	卒業しちゃう4年生に何でも聞いてみよう！ ～数々の困難を乗り越えてきた4年生同窓会+学生生活の疑問&不安相談会	4年生 22名	対面のみ	29名 (29)
12月17日(金)	コミュニティ運営×SDGs×宇宙開発 ～私の世界の広げ方	農 笠原 大靖	対面+Zoom	8名 (1)
12月20日(月)	教えるだけが勉強じゃない!? ～中学生が学び合う寺子屋で先生をやってみた	文 高橋 大輔 理工 清水 紗英里 農 神野 泰成	対面+Zoom	10名 (5)
12月22日(水)	持続可能な地球を考える ～牛乳からプラスチックをつくる環境教室	サークル SHIP 1年 香月 智裕	対面+Zoom	7名 (4)

*カッコ内は内数の対面参加の人数

トークを終えて



- ・思っていたよりもたくさんの方々に話を聞いていただき、改めて身の引き締まる思いです。クリスマスに向けてこれからも精進して参ります。ありがとうございました!!
- ・今回は起業というテーマでお話しさせていただきました。自分が想像していた以上に人が集まり、自分の伝えたいことがどれほど伝わっているかはわかりませんがなにか感じてくれたらうれしいなって思っています。ボラセンでトークをさせていただいたのは4回目で、自分の活動を振りかえるよい機会になるので皆さんもどんどんアウトプットするのを勧めます!

- ・想像していたよりも多くの方が集まってくださり驚きました!自分のボランティアに対する向き合い方や考えを改めて考えるよい機会になりました。ありがとうございました!
- ・沢山の方にご参加ありがとうございました。人前で話す経験はなかなかなく、とても貴重な体験でした。今度は自分が参加して、色々なお話を聞いてみたいです。

- ・コロナウイルスの関係で、なかなか人前で立って発表する機会がない中、このような貴重な体験ができてよかったです。社会人になっても生きるとはどのようなプレゼンの練習になったと思うので、この経験を次の機会に活かしていきたいと思います。
- ・自分たちの行っている活動について、ほかの学生に知ってもらえる機会を作ることが出来て良かった。
- ・自分の活動に興味を持ってもらえたこと、さらにそれを発信できる機会をもらった今回の経験は非常に貴重なものになりました。自分の思いや考えを広く共有できただけでなく、未来に向けて僕自身が大きな一歩を踏み出す力にもなったからです。今後もぜひ、ボラセンの活動に携われたらなと思いました！
- ・牛乳からプラスチックを作るという一見突拍子もないテーマに多くの人に集まっていただき、ありがとうございました。また興味を持ってくれた方に私達の活動を報告することができて大変貴重な経験になりました。来年も中学校に訪問し環境をテーマに授業をする予定なので、興味ある方は是非サークルに足を運んでみてください！



▲プロジェクタでスライドを投影しながらトーク▲



▲Zoomでは同じスライドを画面共有



▲対面での同窓&相談会

韓国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に韓国語や韓国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

講師の韓国人留学生が日本に入国できない状況が続くため、2021年度は春学期・秋学期ともにオンラインで教室を開催しました。

受講学生は韓国の流行に関心が高いため、文化を教えるパートでは韓国のオススメスポットや韓国の若者の間で流行っていることを受講学生に紹介しました。

秋学期の月曜クラスでは食文化・コスメ・スポット・ファッションなど、講師学生から一人ずつそれぞれのオススメを紹介してもらい、バリエーション豊かな文化紹介となりました。

金曜クラスではフリートーキングの時間を設けました。金曜クラスには、講師学生に日本人学生がいたことから、日本人から見た韓国語を覚えるときの注意点として発音をカタカナではなくアルファベットで覚えた方がいいというアドバイスがありました。ほかに受講学生から韓国の相槌についての質問がよせられるなど、より実践的で活用できるアドバイスがありました。

両教室とも、代表者が春学期から教室を開催してくれていたこともあり、授業構成がしっかりしていました。また、講師を続けることで、学生が振り返りから学び、経験を活かして創意工夫を凝らしていることが見て取れる教室となりました。

日時 2021年5月10日(月)～2021年7月7日(水) ※春学期
2021年11月12日(金)～2021年12月20日(月) ※秋学期

方法 Zoom

内容 明大生が明大生に語学や文化を教えたり文化交流を行う

参加 154名

<春学期>

クラス	日時	回数	講師学生	受講学生
月曜クラス	2021年5月10日(月)～7月5日(月) 10:50～12:30	9回	5名	21名
火曜クラス①	2021年5月11日(火)～7月6日(火) 10:50～12:30	9回	2名	19名
火曜クラス②	2021年5月11日(火)～7月6日(火) 10:50～12:30	9回	3名	14名
水曜クラス	2021年5月12日(水)～7月7日(水) 13:30～15:10	9回	4名	27名

<秋学期>

クラス	日時	回数	講師学生	受講学生
月曜クラス①	2021年11月15日(月)～12月20日(月) 13:30～14:30	6回	2名	23名
月曜クラス②	2021年11月15日(月)～12月20日(月) 13:30～14:30	6回	2名	4名
金曜クラス	2021年11月12日(金)～12月17日(金) 11:00～12:00	6回	3名	25名

講師学生の声



商学部3年 カンハンジュ
春学期の韓国語教室に講師として参加した経験がとても楽しかったので、秋学期も参加させていただきました。春学期よりは短い期間だったのですが、その分さらに充実した授業ができてよかったですと思います。今回は月曜クラスのリーダーだったのもっと責任感を持って一生懸命授業を準備しました。日本人の学生さんたちもとても積極的で本当に楽しく、100分の授業時間が足りなく感じるくらいでした。

毎回授業のテキスト内容について講師同士で会議を行い、丁寧に選別し、スライドを編集することは大変でしたが、やり甲斐がありました。この経験を踏まえて、私自身ももっと成長できたと思います。誰かの前に立って発表すること自体が怖かった私も、この授業で講師として授業をリードすることによって、だんだん発表に自信ができました。また、別の学科の友達もたくさんできたのでとても幸せです。

しかもっとも良い点は、やはり自分の国の文化や文法を外国の方に教える経験ができたことです。

韓国語教室に講師として参加することを悩んでいる方はぜひ挑戦してみてください！自分自身の成長に伴い、良い人たちにも会えますので本当にお勧めします！

国際日本学部1年 パクソヒ

春学期に続き秋学期も韓国語教室に参加しました。春学期は初めての参加でしたので、いろいろ足りないところが多かったですが、それを改善して秋学期はもっとうまくできました。

秋学期は金曜日2時間目の授業を担当しました。春学期にも感じたことですが、母国語を教えることは決して簡単なことではありません。この授業を準備しながら、私も韓国語の文法をもう一度正確に勉強したので私の言語能力に役に立ったと思います。

参加してくださった方の中には、春学期に私が担当する教室に来られた方がいたので、重ならない文化を選んで文化パートを作りました。韓国人が直接説明する韓国人の性格、高校でよく遊ぶゲームなど、インターネットではなかなか探せないものを紹介したことは、私たちも楽しく、聞く方にも役に立ったと思います。

フリートキングは、当初の計画には含まれていませんでしたが、韓国語を上手に話せる学生さんとそこまではできない学生さんがいたので日本語で韓国について話すルーム1、韓国語で韓国について話すルーム2を作りました。講師学生の方々も母国語よりは外国語で話す方が勉強に役に立つと思っていたのでルーム1は韓国人の方に、ルーム2は日本人の方に頼んで進めたのですが、急遽設置したフリートキングが思ったより反応が良かったです。そのため、2回目の授業からはスムーズに話が進められるよう、予めテーマなどを決めてフリートキングを行い、この時間が私たちにも学生の皆さんにも良い時間となりました。

私は今年、韓国語教室で代表を担当しましたが、まだ1年生でいろいろ足りなかったと思います。しかし、韓国語教室に講師として参加してくださった方々、受講生として参加してくださった方々の助けがあって韓国語教室を無事終えることができたと思います。来年も余裕があれば韓国語教室に参加したいです。



▲月曜クラス オススメスポットの紹介



▲金曜クラス 韓国で流行っているゲーム紹介

中国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に中国語や中国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

日時 2021年5月10日(月)～2021年7月7日(水) ※春学期
2021年11月15日(月)～2021年12月16日(木) ※秋学期

場所・方法 駿河台キャンパス・生田キャンパス・中野キャンパス・Zoom

内容 明大生が明大生に語学や文化を教える活動や文化交流を行う

参加 118名

<春学期>

クラス	日時	方法	回数	講師学生	受講学生
月曜クラス	2021年5月10日(月)～7月5日(月) 11:00～11:40	Zoom	9回	3名	16名
金曜クラス	2021年5月14日(金)～7月9日(金) 11:00～11:40	Zoom	9回	3名	25名
水曜クラス	2021年5月12日(水)～7月7日(水) 16:00～16:40	Zoom	9回	3名	14名

<秋学期>

クラス	日時	場所・方法	回数	講師学生	受講学生
木曜クラス	2021年11月18日(木)～12月16日(木) 11:30～12:30	駿河台キャンパス	5回	3名	18名
木曜クラス	2021年11月18日(木)～12月16日(木) 15:20～16:20	生田キャンパス	5回	3名	4名
木曜クラス	2021年11月18日(木)～12月16日(木) 13:30～14:30	中野キャンパス	5回	2名	14名
月曜クラス	2021年11月15日(月)～12月20日(月) 15:20～16:00	Zoom	6回	3名	7名

各クラスの様子



学生もオンラインに慣れてきはじめてた春の中国語教室は、最初からレベルと内容を詳しく設定して受講生募集周知を行い、それぞれに特徴ある教室を行いました。

春学期は、前年度の中国語教室の講師が今回初めて講師を行う学生をサポートしながら講座運営を行い、活動に対しての振り返りから学びを得る姿が印象的でした。また、受講学生も2021年度から続けて参加しており、講師学生も受講学生も継続して活動を行ったことでの成長が伺えました。

秋学期の中国語教室は3キャンパスで対面開催と1クラスがZoomでオンライン開催となりました。

【駿河台キャンパス】駿河台キャンパスの対面教室では、初日は講師学生と受講学生が1対1になって、中国語での自己紹介を教えてくださいました。対面のいいところは近くでニュアンスを聞き取りやすいところです。少し引っ込み思案な生徒や先生でも話しがしやすく、初日ですぐに学生同士は打ち解け合っていました。

【生田キャンパス】理工系学部の生田キャンパスでは申込者が少なく、周知方法などに改善点が多い教室となってしまいましたが、講師学生の意欲は大きく、資料が丁寧に作られていました。

【中野キャンパス】中野キャンパスでは継続して教室を開催している学生が教室を開催してくれました。受講学生の苦手な発音箇所をしっかりと復習し、ピンイン付きの日本の47都道府県の資料を用意するなど、とても丁寧でわかりやすい資料が用意されており、講師学生、受講学生ともに楽しんで教室に参加している様子が伝わってきました。最終日は講師学生が漢服を持ってきて、受講学生が着てみるという対面開催のメリットが活かした体験型の教室となりました。

【Zoom 配信】秋学期唯一の Zoom で開催した中国語教室では、受講学生が空港の免税店で働く予定があり、中国人に接する機会が多くなるため中国語に触れてみたいと話をしてくれたこともあり、空港やお店などで使う機会の多い会話の練習に多く時間を使いました。受講学生の中国語勉強の理由に配慮した実践的な内容の授業になりました。

講師学生の声



文学部 2年 平 傑 涛

私は今年、春学期の中国語教室を通じ、異なる背景の受講生たちと一緒に単語と文法を勉強しました。その間、会話練習と発音矯正を行い、中国の歴史・文化・社会など多様な事に触れました。中国語の学習に励んでいる明大生の力になれば、幸せでした。自分もこのような機会の中、一人一人の意見を尊重しながら、柔軟にスケジュールを調整し、達成感と成長を実感しました。

また、受講生たちと一緒に経験と想いを共有していくうちに、ステレオタイプも打ち破り、異なる国籍の人々の間に、友好関係を築きました。明治大学にこのような国際交流の場を提供してもらい、ありがたいと思っています。

これからも、中国語教室に参加する機会があれば、是非参加させていただきたいと思います。

専門職大学院 会計専門職研究科 1年 周 夢 格

今回のボランティア活動を通じて、講師学生の3人だけではなく参加者の学生とも仲良くなりました。皆さんと交流をする中で、授業に興味をもってもらえて、考えるべきことがたくさんあることを知りました。また、教室を通じて参加者との交流が深まり、自分の国のことを紹介できたうえに、日本と中国のことも勉強になりました。語学教室ボランティア活動は自身のコミュニケーション能力が鍛えられるいい機会だと3人とも思っています。

今回参加の皆さんは、中国についてとても興味を持っており、それぞれに知りたいことがありました。可能であれば、開催前に参加者に知りたいことなどのアンケートを実施すれば、活動はよりスムーズに進行できると思います。

今回のボランティア活動は、これからの学生生活にとって意味がある、いい経験になりました。

国際日本学部 3年 侍 子 安

秋学期の中国語教室は中国語事情をテーマとして、受講生の意見を聞いて、基礎の中国語以外にも、ダブル11、中国の学校生活、アイドル、伝統的な服、若者言葉などを紹介しました。今学期は対面で行ったため、わからないことがあったらすぐ答えることができ、特に毎回若者言葉を紹介する時、とても盛り上がっていました。中国語・中国文化が好きな受講生と交流し、質問に答え、一緒に伝統文化を体験することがとてもうれしかったです。講師になって、ただ中国語を教えるだけではなく、異文化交流を行い、さまざまな背景を持つ人と友達になり、非常に貴重な経験になりました。



▲春学期 月曜クラス (中上級)
中国神話の説明



▲秋学期 Zoom
空港周辺や関連する会話についての解説



▲秋学期 駿河台キャンパス
初日。自己紹介文をグループに分かれて作成



▲秋学期 生田キャンパス
「中国料理」について



▲秋学期 中野キャンパス
漢服を着て撮影

日本語教室 中野

日本に来ることができない留学生との交流や、留学生に日本語で話す機会を作るという目的で明大生が明大の留学生を対象に開講している日本語教室ですが、春学期はそれぞれの国の文化についての会話だけでなく、日本文化を紹介したり日本語での絵しりとりゲームを取り入れたり、参加者である留学生も会話を楽しめるよう工夫する様子がみられました。

秋学期には、他の語学教室で講師を担当する留学生が自身の日本語スキルを上げるために日本語教室へ参加してくれました。生徒として交流を行いながら会話スキルの向上を目的にしており、留学生の向上心が日本人学生に影響を与えている姿が印象的でした。

講師役の日本人学生も、参加留学生の日本語レベルに合わせて柔軟に対応を行い、日本語がまだ不慣れな学生には時折英語も交えて、なぜ日本の大学に留学したいと思ったのか、それぞれの出身国のオススメスイーツや、出身地域のオススメスポットなどの会話で楽しんでいました。

日時 2021年5月13日(木)～2021年7月15日(木) ※春学期

2021年11月12日(金)～2021年12月24日(金) ※秋学期

方法 Zoom

内容 明大生が明大生を対象に日本語および日本文化を教えたり文化交流を行う

参加 56名

＜春学期＞

クラス	日時	回数	講師学生	受講学生
木曜クラス	2021年5月13日(木)～7月15日(木) 12:40～13:10	10回	8名	24名

＜秋学期＞

クラス	日時	回数	講師学生	受講学生
金曜クラス	2021年11月12日(金)～12月24日(金) 12:40～13:20	7回	3名	10名
金曜クラス	2021年11月12日(金)～12月24日(金) 15:30～16:30	7回	5名	15名

講師学生の声



国際日本学部1年 野口愛琉

コロナ禍で留学生が日本に来ることが難しく、留学生と交流する機会がなかなかなかったので、国際交流の場として参加しました。日本語を教えることは初めての経験だったのでうまくできるか不安もありましたが、学年を超えて協力し合い、実施することができました。

私たち日本人が日本のことについて教えるだけでなく、私たちもそれぞれの国のことについて教えてもらうことで、相互理解を図りました。日本に興味を持った留学生の方々に参加していただき、それぞれの文化や食べ物などのトピックについて紹介し合いました。中には、日本語を第三言語として学習している留学生の方もいて、私自身非常に刺激を受けました。様々な学生とつながることのできる、貴重な経験となりました。課題点として、参加する講師メンバーが限られてしまい、参加する留学生の日本語レベルに合わせて対応することが難しかったことがあげられます。より多くの留学生の方に参加していただき、日本語教室がさらに活発なものになるとよいと思いました。



▲春学期 日本のマナーについて説明を行う様子



▲秋学期 チャットを使って出身地域のおススメスポット紹介

英語教室 中野

ピーターラビットの物語を聴講し和訳と解説を聞くという講座を行いました。

受講生にクイズに回答してもらったり、実際に物語の音読や和訳をしてもらう回もありました。

また、作者のビATRIX・ポターについての紹介もあり、日本で楽しめるギャラリーミュージアムなどが紹介されました。

聴講音声内容

『The tale of Peter Rabbit』

『ベンジャミンバーニーのおはなし』

『フロプシーのこどもたち』

『こねこのトムのおはなし』『モペットちゃんのおはなし』

『とっても悪いうさぎのおはなし』『2ひきのわるいねずみのおはなし』

『のねずみチュウチュウおくさんのおはなし』『街ねずみジョニーのおはなし』

『リスのナトキンのお話』

『あひるのジマイマのおはなし』

日時 2021年5月10日(月)～2021年7月5日(月)

方法 Zoom

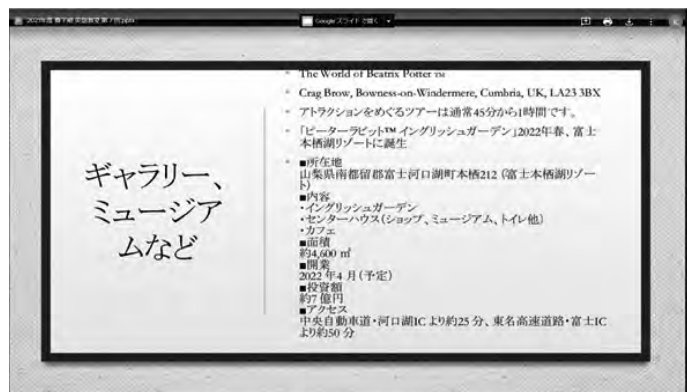
内容 明大生が明大生に語学を教える

参加 16名

<春学期>

クラス	日時	回数	講師学生	受講学生
月曜クラス	2021年5月10日(月)～7月5日(月) 10:50～12:30	9回	2名	14名

<秋学期> 開催なし



▲日本で楽しめるギャラリーミュージアムの紹介

連続講座「SDGsを知って、私たちにできることを考えよう！」和泉

近年、ニュースや授業など様々な場面で「SDGs」が取り上げられることが増えました。そこで、活動に関わる学生たちがSDGsを意識することで、活動意欲がより高まるのではないかと、あるいは、既存の活動に限らず、身近な課題をきっかけに自分たちにできるボランティアを考えていくことができるのではないかと考え、教員、大学院生の協力のもと2021年度、新しく連続講座を企画・開催しました。

連続講座前半の第一弾、第二弾は、ワークショップ形式で新聞記事や身近な関心事や教育をテーマにSDGsとの関連や、大学生にできるアクションについての意見交換を行いました。後半の第三弾はPart1からPart3の3回に分け、それぞれ講師を招き、セミナー形式で様々な視点からボランティアを学ぶ機会を設けました。さらに第四弾は、実践編として具体的に大学生に何ができるのかを考えていきました。

これからもSDGsの観点から様々な社会問題に触れ、活動を模索できるような機会を検討していきたいと考えています。

- 日時** 2021年4月28日(水)～2022年1月12日(水) 全6回
- 方法** Zoom ※②のみ和泉キャンパス内教室とZoomのハイブリッド
- 参加** 53名
- ファシリテーター** ①～⑥ 高橋 華生子(情報コミュニケーション学部専任講師、副センター長)
③～⑥ 経営学研究科2年 岡田 天太

日時	タイトル	内容	参加
① 2021年4月28日(水)	<第一弾> 新聞記事から考えてみよう	ワークショップ形式で「ファストファッション」に関する新聞記事を読み、関連するSDGsゴールについての意見交換	11名
② 2021年6月21日(月)	<第二弾> 教育	ワークショップ形式で、ノーベル賞を受賞したマラフ・ユスフザイさんの事例を元に大学生にできるアクションを考え、意見交換	5名 (対面3名、Zoom2名)
③ 2021年10月20日(水)	<第三弾 Part 1> SDGsとボランティア活動～次世代を担う我々学生が取り組むべきこと	学生の立場でどのようにSDGsを実践し社会問題を解決できるか等を交えた自身のボランティア体験談、質疑応答、意見交換 ゲストスピーカー： 経営学研究科2年 岡田 天太	10名
④ 2021年12月1日(水)	<第三弾 Part2> ビジネスにおけるSDGsの重要性 学生時代に取り組むべき社会貢献	社会人の視点から見たボランティアの意味や学生時代の体験談、ボランティアを継続していく大切さについての話、質疑応答、意見交換。 ゲストスピーカー： 牛尾 美湖 氏(りそなホールディングスSDGs推進室)	13名
⑤ 2021年12月15日(水)	<第三弾 Part3> 世界最大のNPOと考えるSDGsと社会課題	国際的な視点からSDGsや社会課題についての話、質疑応答、意見交換。 ゲストスピーカー： 比嘉文氏(NPO法人Hands On Tokyo)、 ユコヴィッチ・マキ氏(NPO法人Hands On Tokyo)	12名
⑥ 2022年1月12日(水)	<第四弾> 実践編	身の回りにある社会問題を考え、課題の解決ができるアイデアを提案、実行していくための意見交換 ゲストスピーカー： ユコヴィッチ・マキ氏(Hands On Tokyo)	2名

経営研究科2年 岡田 天太

感想



2015年9月の国連サミットで「SDGs」が採択されてから早6年、町中を歩いているといたるところでこの言葉を目にするようになった。「SDGs」は、わかりやすい17のゴールとそれらをビジュアル化したカラフルなロゴを通して、多くの人へ社会問題に関心を持つきっかけを与えた。私たち学生も多分に漏れず、講義や普段の生活の中で「SDGs」に触れることは多い。加えて、今の学生はZ世代と呼ばれ、その特徴の一つとして、エシカル消費をはじめとするソーシャルインクルージョンの価値観を持つと言われている。

そのような情勢の中で、「SDGs」を知っているだけでなく、17のゴールを達成するために具体的な実践をしている人がどれだけいるだろうか。これからの世界を生きていく我々学生は、この17のゴールを知っているだけでなく、達成するための実践をしなければいけない。社会を持続可能なものにしていくためには、社会問題を自分ごとに捉え、その解決策を考案/実践していく学生を増やす必要がある。

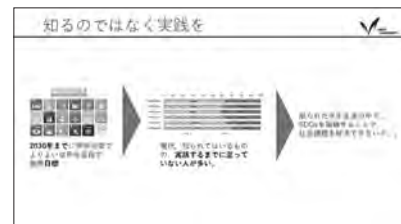
今回実施したセミナーやゲストスピーカーの経験談を通して、「SDGs」を実践することの大切さを知り、社会問題の解決を目指す意欲的な学生が一人でも増えることを願うとともに、そのような学生のモデルケースとなれるよう、これからも真摯に社会問題と向き合っていきたい。



▲第二弾



▲第三弾で使用された資料



▲第三弾で使用された資料 2

明治 2020@ikuta プログラム 生田

2019～2020年度のテーマ“東京2020大会”のグループは解散し、2021年度は“コロナ禍”をあらたなテーマに、“コロナ禍で困っている人達が、便利になったり喜んだり助かったり幸福を感じたりするサービス”を、学生が立案し、実行をめざすプログラムとして再出発し、ミーティングを重ねました。今後もメンバーを増やし具体的な実行をすすめていくことになりました。

日時 2021年6月29日(火)～2022年3月31日(木)

場所 生田ボランティアセンター、学生ラウンジ、生田キャンパス内教室、Zoom

内容 I アイデアソンの開催・・・アイデアソンを2回開催し、13種類のアイデアスケッチを作成

II テーマの集約・・・アイデアスケッチを共有し合い、3つのテーマに集約

III 立案・・・テーマごとにグループで話し合いを行い、具体化していく

参加 98名（ミーティング等31回）

テーマ コロナ禍で困っている人達が、便利になったり喜んだり助かったり幸福を感じたりするサービスを考案する

① 大学近隣の飲食店を応援する

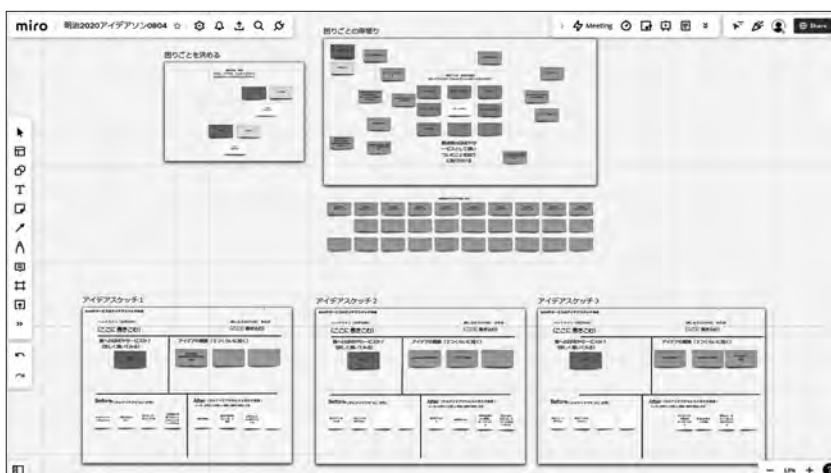
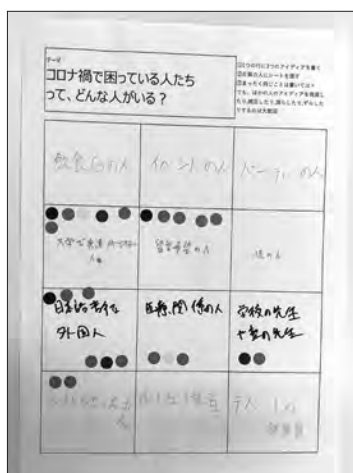
対象は大学近隣の飲食店。実際に困っているのか、どのように困っているのか、自分達学生に何かできることはあるか。

② 明大生の交流の場をつくる

対象は生田キャンパスの学生、とくに新生や留学生。友達作りの場をつくれないうか。また交流アプリを作れないうか。

③ 自主勉強会をひらく

対象は生田キャンパスの学生。コロナ禍で、半数対面・半数オンラインの授業が出現したが、その時間帯に勉強会をひらき、とくに初めてで勝手や作法がわからない新生が、共にレポートを書いたり勉強できる場をつくれないうか。先輩が伴走して見守ったりアドバイスできないか。



▲アイデアソンの様子

みんなで創る「せいり」トーク 中野

日本人学生の5人に1人が悩む「生理の貧困」について正しい知識を学ぶため、岸磨貴子准教授のゼミ生が企画し、近畿大学付属病院産婦人科の藤田由布医師をお招きし、講演会および交流会を開催しました。

イベント HP http://allstars.m-kishi.com/seiri_talk/

日時 2021年7月7日(水) 15:20～17:00

主旨 ①生理や子宮頸癌を中心とした、広く知られていない婦人科系の問題について正しい知識を広めること
②友人同士で気軽に生理に関連する話ができる関係性や環境を作ること

内容 第一部では、中野キャンパスホールでの対面形式と、YouTube ライブ配信を同時におこなうハイブリッド型で実施し、キャンパス内外問わず、様々な場所から学生が参加しました。安心して婦人科へ来てほしい、なんでも相談してほしいという藤田医師の気持ちが溢れた聴講イベントとなりました。

第二部の藤田医師と学生の交流会では、参加者が自分の生理や婦人科受診の経験を話し、より具体的な問題を先生に質問をすることで、女性の身体で起こる、放っておいてはいけない諸問題を全員で共有しました。

生理や生理痛など、女性の身体に起こる問題について、友人やかかりつけの婦人科医に相談することの大切さを学ぶ機会になりました。

場所 第一部講演会…対面(中野キャンパス・ホール)
及び リアルタイムオンライン(YouTube ライブ配信)
第二部交流会…対面(中野キャンパス内教室)
及びリアルタイムオンライン(Zoom)

企画・運営 学生9名

参加 第一部…学生49名(対面10名、オンライン39名)
第二部…学生17名

ゲストスピーカー 藤田 由布 氏(近畿大学付属病院 産婦人科医師)

参加者の声



国際日本学部3年 石川智瑛

「みんなで創る生理トーク」イベントは、岸先生のご友人である近畿大学の産婦人科医藤田由布先生のお声がけから始まり、岸先生、中野ボランティアセンターのスタッフの方々、そして有志のゼミのメンバーで協力して創り上げたイベントでした。企画・運営に際して、心掛けたことは以下の4点でした。

1. 誰でもどこからでも参加可!

学部や性別や場所、環境に捉われずに参加できるように講演をYouTubeでライブ配信しました。また、中野キャンパスのホールでも視聴できるようにし、ひとりで見るともよし、友達と一緒に見るのもよしの環境を作りました。

2. リアルタイム・匿名で医師にコメント

「すぐきく」というアプリを使って匿名で質問やコメントができるようにしました。「自分は男性だが、どのように配慮すればいい?」という質問や、「すぐに婦人科に行こうと思う」というコメントなどがあり、視聴者が由布先生とコミュニケーションを取りながら参加しました。

3. 事前予約制で女性限定の交流会

婦人科になかなか行く勇気が出ない、自分の症状は病院にいった方がいいのかな、という悩みを共有したいという声に応えるために全体の講演が終わったあとに由布先生と女子学生のみでの交流会を行いました。配信はせず、個人情報の取扱いにも十分注意して事前予約制の限定交流会にしました。

4. ポップなWEB やチラシ

イベントに気軽に参加してもらうために、WEB サイトやチラシをポップなデザインにしました。これらはイベントを知ってもらうきっかけづくりのためです。やわらかい色やイラストでイベント参加へのハードルを低くし、誰もが参加しやすい雰囲気をつくりました。

イベントの企画・運営を通して「誰もが参加しやすい場づくり」について学びが深まりました。ボランティアセンターにはチラシをトイレに掲示したいという要望に応じていただくなど様々な面でご協力いただきました。ご協力いただいたことで、学生だけの活動にとどまらず、全学での取り組みにさせていただいたことにとっても感謝しています。

国際日本学部4年 富田 楓子

今回は、ゼミで企画したイベントを中野ボランティアセンターに広報や場所の確保などの面でご協力を得ながら開催させていただきました。

コロナ禍で制限の多い中、オンラインと対面を組み合わせたハイフレックス型でのイベント開催は初めての試みで、大変なことも多くありました。しかし、男性や他学部の学生を含む多くの方に参加いただくことができました。

今回のイベントには男子学生も参加してくれており、積極的に質問し、理解しようとしてくれる姿勢がとても嬉しく感じました。

また、イベントの後半では、実際に生理についての悩みを抱えた女子学生同士で集まって話を共有し、先生に相談に乗ってもらう時間がありました。私自身、1人1人がそれぞれの悩みを抱えていることを実感し、悩みがあるのは自分だけではないと安心することができました。

「生理の貧困」について近年注目が集まっていますが、まだまだ女性同士でも生理について話しにくい空気があると思います。今回のイベントを通して、本当の意味での「生理の貧困」には、経済的な問題だけでなく、話しにくい雰囲気から生まれる情報不足も含まれるのではないかと感じました。性別に関係なくより多くの人の立場からの悩み相談や情報共有が、気軽に行われるようになるといいなと思います。

今後も学生とボランティアセンターがより近い距離で協力できる関係性が続くこと、学生の積極的な活動がたくさん形になることを願っています。



▲ゼミ生が作成した周知チラシを中野キャンパスの女子トイレに設置しました



▲配信中の様子



▲岸ゼミ生のみなさん

杉並区高齢者との「お茶会」和泉

和泉ボランティアセンターでは、地域包括支援センター「ケア 24 永福」と連携し、近隣地域にお住まいの方々と互いに交流を深め、安心して生活できる地域づくりを目指した交流会「お茶会」を定期的実施しています。学生たちが交流会の企画の検討・運営を担っています。これまでに、数多くの地域の方にご参加いただき、長年の活動が認められ、2021年度は杉並区より「青少年善行表彰」をいただきました。

残念なことに、2020年度はコロナウイルスの感染防止の観点から中止となりましたが、2021年度からはオンラインでの実施を開始しました。準備段階でも学生同士が集まることができない状況の中、オンラインでの打ち合わせでアイデアを出し合い、5月に全3回のお茶会が実現しました。Zoomブレイクアウトルームを利用し6人から9人ほどのグループを作り、楽しく和やかな交流をすることができました。

また、オンラインではお茶会に参加が難しい高齢者もいらっしゃった為、7月には、「会えるようになった時にやりたいこと」や「夏休みの過ごし方」を書いたお手紙を届けることにしました。地域の方々に夏のメッセージとしてケア 24 永福の方が届けてくださり、地域の方々に大変喜んでいただきました。たくさんのご返信もいただき、この繋がりを大切にしていきたいと改めて思いました。

その後、2022年3月も3回実施し、オンラインでも楽しんでいただける内容を企画し大いに盛り上がりました。

会えない中で出来ることを模索した1年でしたが、今後も感染状況を見ながら、繋がりを持ち続けられるように取り組んでいきたいと思っています。

日時 2021年5月29日(土)～2022年2月28日(月) 全7回

参加 明大生 37名、明大職員 19名

内容 〈5～6月のお茶会〉

- ・国旗当てクイズ、日本史クイズ
- ・「雨の日にやること」、「お祭りの好きな屋台」、「夏になったらしたいこと」などをテーマにした歓談

〈2月のお茶会〉

- ・○×クイズ、三択クイズ
- ・連想ゲーム
- ・「入学・卒業の思い出」などをテーマにした歓談

〈お手紙企画〉

「会えるようになった時にやりたいこと」や「夏休みの過ごし方」と、共通メッセージ「会える日をおもって、今日も優しく」を添えた手紙を学生各自が書き、ケア 24 永福を通じて13通を配布、地域の方からは11通の返信があった。

日時	方法	参加	来場	
2021年5月29日(土)	14:00～15:30	Zoom	明大生7名、明大職員3名	地域の方8名
2021年5月31日(月)	13:30～14:30	Zoom	明大生5名、明大職員3名	地域の方7名
2021年6月2日(水)	13:30～14:30	Zoom	明大生4名、明大職員3名	地域の方5名
2022年2月25日(金)	14:00～15:00	Zoom	明大生4名、明大職員3名	地域の方9名
2022年2月26日(土)	14:00～15:00	Zoom	明大生4名、明大職員3名	地域の方7名
2022年2月28日(月)	14:00～15:00	Zoom	明大生5名、明大職員3名	地域の方7名
2021年7月	手紙	明大生8名	地域の方11名	

参加学生の声



経営学部3年 山口航貴

2021年度のお茶会も、主にZoomを利用したオンラインでの開催となりました。コロナ禍が始まった頃は、オンラインでお茶会を開催することに不安や抵抗がある方たちもいらっしゃったと思われるのですが、コロナ禍が二年目となる2021年度では、学生やスタッフだけでなく、高齢者の方々もオンライン機材を扱うことに慣れてき始め、どの会もスムーズに進行させることができました。また、それ以外にも特に自分が嬉しかったこととして、1、2年生の新メンバーがたくさん加わったことがあります。2020年度は、コロナが流行し始めた影響でメンバーを募集することが満足にできず、新メンバーがほとんどいない状態でした。もちろん今まで通りのメンバーで活動することは楽しかったですが、次の年になった時に先輩たちが就活等で参加数が減ってしまうことを考えると不安が残りました。しかし、2021年度は少なながらも新メンバーを募集するための活動ができ、新たに1、2年生のメンバーが入ってきてくれました。対面で実施することは叶いませんでしたが、自分たちの代が中心となり、新たなメンバーと共に開催してきたお茶会では、自分たちで準備することの面白さや、高齢者の方々がたくさんお話しができることの楽しさ等といったお茶会の魅力を後輩たちに伝えることができたと思います。

今年度の活動をもとに来年度以降もお茶会が盛り上がっていくこと、また、再び対面でのお茶会が開催される日が来ることを切に願っています。



▲ Zoom開催の様子



▲ 7月にお届けした学生たちの手紙



▲ 地域の方からいただいた返信

子ども

竹とんぼ教室 和泉

子ども達に竹とんぼ教室を行う団体「どこでも竹とんぼ教室・杉並」が、杉並区内の公園、児童館やお祭りなどで開催する教室に、大学生が先生役のボランティアとして参加しています。事前に作り方や注意事項を把握しておくための講座を受講した後、子ども達との交流を通して、外で遊ぶことや物づくりをする楽しさを伝える活動を行っています。2021年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、夏休みの活動は叶いませんでしたが、冬以降に再開しボランティア活動ができる数少ない機会になりました。

日時 2021年12月10日(金)

参加 4名

日時	場所	参加
2021年12月10日(金)	下高井戸児童館	4名
2022年2月9日(水)	上高井戸児童館	3名(コロナ感染拡大で辞退)
2022年3月6日(日)	すぎなみサイエンスフェスタ	コロナ感染拡大で中止

連携 どこでも竹とんぼ教室・杉並



▲チラシ



▲製作した竹とんぼ

二階堂高校「ボランティア入門講座」体験談発表 和泉

日本女子体育大学附属二階堂高校の社会福祉選択授業内「ボランティア入門講座」で生徒に対し、ボランティア活動経験のある大学生が、自身の活動体験、コロナ禍での取り組みや思いなどを話しました。今後、高校生が活動を始めるにあたっての、知識や考え方を学ぶ機会として、活動への意欲を高めると共に、ボランティアをより身近に感じてもらうことが目的です。コロナ禍以前は直接学校へ行き、お話していましたが、2020年度に引き続き2021年度もコロナウイルスの感染防止の観点から、大学生はオンラインで参加しました。

日時	2021年7月5日(月) 13:25～15:05
方法	Webex
受講	二階堂高校保健福祉コース1年生 12名
参加	明大生3名



感想

政治経済学部2年 力安 香菜子
この度は貴重な経験をさせていただきありがとうございました。誰かの前で自身自身の体験談を語るというのは、私にとって初めてのことであり、どんなことを話せば高校生たちにボランティアへ興味を持ってもらえるか、とても考えさせられました。学校の先生と同じような視点で、どうしたら生徒さんたちに興味・関心を持ってもらえるのかを考え、特にPowerPointを用いて視覚的に訴えかけるようなものを作ったのが、自分の中でとても印象的です。

自分自身のことを話すことで、なぜボランティアを始め、なぜボランティアを続けているのか、己を改めて振り返ることとなり、私にとってもモチベーションが高まる有益な機会となりました。高校生のみなさんにどれだけボランティアの魅力が伝わったかは分かりませんが、生徒の皆さんの真剣な眼差しがとても嬉しかったです。福祉の世界での人材不足は常なる課題であり、時間と体力のある私たち若い世代が率先して力になればと思っています。今回お話ししたことで、少しでも多くの生徒さんがボランティアに興味を持って、今後の行動につなげてくれれば嬉しいです。

政治経済学部3年 高崎 滯

今回、高校生にボランティアの体験談をお話しましたが、改めて自分の中でも活動を振り返る機会となりました。準備している中で、今までの色々なエピソードや感情を思い出しましたし、ボランティア活動は相手を想って行うものであると同時に、自分のためにもなっていることを再認識しました。コロナで制限される中ではありますが、今後も様々な方法で活動を続けていきたいと思いました。また、当日は他のボランティア活動をされている学生さんのお話も聞くことができ、とても興味深かったので、機会があれば私自身、他の活動も行ってみたいと思いました。

さらに、私は大学生になってボランティア活動を始めましたが、高校生の中にはすでに行っている人もいて、びっくりしました。一方で、まだ機会がない、踏み出せていない高校生もいるようだったので、今回の体験談を聞いて、少しでもボランティア活動に興味を持ち、実際にやってみようと思ってくれる高校生が出てきてくれれば、非常に嬉しいです。

法学部3年 小川 温也

今回の二階堂高校での発表は私にとって非常に価値のある機会となった。私は今までいくつかのボランティア活動をしてきたが、それを振り返って“人に伝える”といった機会はほとんどなかった。今回の発表はまさに自分のしてきた活動を振り返り、それを生徒さんたちに伝えるといった機会。初めは、どのように発表するべきかわからなかった。そんな時にボラセンの職員の方から「活動したうえでリアルな感想」を伝えるべきとの助言を頂き、私は今までにしてきた活動を振り返ってみることにした。そして、振り返るにつれて自分のボランティア活動のきっかけや本格的にやろうと思った転換期、現在の活動をする理由等、今まで意識してなかった自分のボランティアに対する姿勢を再確認することができた。正直、忘れかけていた活動もあったが自分のボランティア活動史を振り返ったことで、当時のパッションが蘇り、自然とこの想いを人に伝えたいと思うことができた。

今回の発表はオンラインであったため、なかなか伝わりにくかった部分があったと思うが最後に生徒さんから質問を頂いたときは「きちんと聞いてもらえていたんだ!」という思いになり、嬉しかった。また生徒さんたちの半分近くがボランティア経験者であることに驚かされた。今度は面と向かってコミュニケーションを取りたいと思った。

この機会を通して、体験を伝えることでボランティアの輪を広げていくことの重要性和やりがいを感じることができたので今後はそういったことも意識していきたい。

また、この発表を機に再確認することができたボランティアへのパッションを忘れずにこれからも活動に取り組んでいきたい。



▲オンラインで活動の体験紹介をする明大生



▲教室で話を聞く高校生たち

科学博士になろう① 生田

キャンパス近隣の児童館で土曜日に開催している、一日完結型の科学教室プログラムです。学生が気軽に参加できるよう、また、生田以外のキャンパスの学生であっても参加しやすいよう、実験テーマは予めボランティアセンターが決め、学生が集まる日は当日だけで事前の打ち合わせなしで教室をひらきます。

2020年度はコロナ禍で「大学生が子どもに対面しない」形で開催しました。子ども達は児童館に集まっているので子ども同士の交流はある一方で、大学生はその場にいられないため、子どもの反応を確かめられず、自分の行動の評価も難しいという、大学生にとってダメージが大きい開催方法であることがわかりました。そこで、2021年度は、感染状況の推移を見ながら、感染状況が落ち着いている時期に合わせて、対面で開催することを大切にしました。

感染対策を講じ、学生同士とセンターは事前にLINEオープンチャットでつながり、体調管理や記録の共有など、安全な教室を開催するための工夫を凝らしました。オープンチャットは実験内容を詳細に共有できるなど、質の高い教室を開催することにも役立ちました。

日時

① 2021年6月26日(土) *アイデア出し 2020年6月15日(火)
② 2021年10月23日(土)

場所

三田こども文化センター、生田ボランティアセンター *アイデア出し…Zoom

内容

小学生むけ科学教室の開催

参加

12名 *アイデア出し 3名

体験

子ども18名

方式

小学生1～3人に明大生1～2人が寄り添う小グループ方式。

テーマ

①平面コースと立体コースのガウス加速器づくり
②アルギン酸ナトリウム水溶液に乳酸カルシウム水溶液を静かに投入し、膜を作成、つかめる水だんごをつくる

連携

三田こども文化センター

子どもたちの声



- ・磁石をくっつけるだけですむからびっくりしちゃいました
- ・大学生が優しく教えてくれたのもすごく楽しかったし、不思議で面白かった
- ・ピタゴラススイッチが連続でできた。鉄球が落ちないように考えられて楽しかった。作る時すごく苦労して作り終わったときに「すごいなー」と思いました
- ・大きいくらい作りが楽しかった
- ・うまくできなかつたけれど、いろいろなことがわかったし、作りたかったです

参加者の声



国際日本学部2年 住吉 華枝
コロナ禍において大学に足を運ぶ機会が無くなり、サークル活動も禁止されてしまっている中で、何かできることはないかと思って参加したのがきっかけでした。子供と関わるのは中学生の時にしたボランティア以来だったので楽しみと不安が入り混じっていました。科学に触れるのも二年ぶりだったので緊張しました。

子供たちに教える前の実験手順の確認では、和やかな雰囲気の中で仲間と話しながら作業を進めました。普段なかなか関わる機会がない学部学年が違う人たちと話すことが出来て新鮮でした。そして、「ガウス加速器」というのを知らなかったので私自身とても楽しみながら参加することが出来ました。

子供たちが集まって来て席に着いた時には、どの子も緊張しているように見えてましたが、いざ始めると楽しそうに積極的に取り組んでくれてたくさんの笑顔を見せてもらいました。

普段なかなかできない経験をできるということに、このボランティア活動の魅力を感じます。たった一日のボランティア活動でも多くのことを学ばせてもらいました。企画から関わられるボランティアにも参加しようと思います！

文学部3年 石橋 冬華

私がボランティアに参加して楽しかったことは、子どもたちの発見の場に立ち会えたことです。参加する前は「子どもとうまく話せるだろうか」と緊張していましたが、いざ始まると活発な子どもたちがいろいろな発見をするので、時間があっという間でした。特に発見の場に立ち会いながら、子どもたちの「なんで？ どうして？」という純粋な疑問を一緒に考えて、一緒に新しい気づきを得ることが楽しかったです。普段自分では考えもしなかった視点や着眼点に驚かされることも多く、私自身も様々な発見を得ることができました。

また想定外だったことは、子どもたちが実験の成功ではなく、面白さや楽しさを重視していたことです。参加する前は「実験が成功することや、綺麗な水だんごに喜ぶだろう」と考えていましたが、実際は子どもたち自身の手で何かをつくる面白さに喜んでいました。どれだけ実験が完璧にできるかということではなく、楽しく学ぶことを大事にしているように感じました。この出来事から、楽しんで取り組むことが効果的な学びに繋がるのではないかと考えました。

ボランティアでの子どもたちの取り組みから、学びの大切さや、探究心の重要性に気付くことができました。非常に貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



▲第1回ガウス加速器



▲第2回水だんご

科学教室の実験テーマ創り **生田**

科学教室の実験テーマ創りは2015年度からの恒例プログラムです。コロナ禍以前は、長期休業期間の数日間短期集中プログラムで、実験テーマ創りからフィニッシュのこども科学教室開催までがセットになっていました。コロナ禍の2020年度は、学生同士が対面できなくなり、ひとまずできることをと、実験的にテーマ創りを各自の自宅とオンラインとで始めました。多彩なメンバーがあつまり、テーマが創られ、冬の科学教室オンライン開催に結実しました。

2021年度は、4月と7月に緊急事態宣言が発令され、再度、先が見通せない状況となりました。そこで2020年度と同様、自宅とオンラインでの実験テーマ創りを行いました。キャンパスを超えて多彩なメンバーがあつまりました。テーマが創られ、この後緊急事態宣言が解除され、課外活動がある程度認められるようになったため、11月と3月の“対面”での教室開催に結実しました。なお、実験テーマ創りと、フィニッシュの科学教室開催の準備は、連続していて切り分けは困難ですが、本報告書では、テーマ創りから教室準備までの企画の部分は本記事にて、事前リハーサルから当日運営までの部分は科学博士になろう②(→P.47)にて紹介しています。

日時 2021年8月3日(火)～2022年2月10日(木)

方法

試作	センターが材料を郵送し、学生が自宅にて試作を行う あるいは生田ボランティアセンターに集まって行う
共有	Miro、LINE オープンチャット、Google スプレッドシート
会議	Zoom

内容 科学教室の実験テーマを創る。また、創ったテーマで科学教室「科学博士になろう」を開催できるよう企画準備を行う。

テーマ創りとは、メンバーがしてみたい実験や工作の情報を持ち寄り、試作候補を決め、同じ材料を使って自宅にて試作し、試作結果を共有し、実験テーマを絞り、最終決定する。

企画準備とは、テーマごとに運営グループを結成し、材料や器具の選択、当日フローと実験内容の決定、そのための試作や準備を行う。いずれも、自宅や生田ボランティアセンターでの試作と、オンラインミーティングとで構成される。

参加 118名(オンライン会議24回)

テーマ

	テーマ数	テーマの内容
持ち寄ったもの	35	輪ゴムを転がそう、毛細管現象の水飲み鳥 など
試作したもの	8	水と油、磁石で登るテントウムシ、クロマトグラフィー、温かい部屋で氷の結晶、水上で咲く紙の花、虹色のコマ、スーパーボールと弾性、水中シャボン玉
決定したもの	3	色の分解2、水と油



▲試作の状況を動画や画像で共有▲

科学博士になろう② 生田

キャンパス近隣の児童館で開催している恒例の科学教室プログラムです。科学博士になろう①が一日完結型であるのに対し、このプログラムは前段となるテーマ創りや企画も学生が行っています。P.46の実験テーマ創りを小学生に実践するプログラムになります。1年ぶりに大学生が対面で運営することが出来ました。

日時

① 2021年11月27日(土) ② 2022年3月22日(土)
③ 2022年3月25日(土)

*事前リハーサル ① 2021年11月12日(金) ② 2022年3月7日(月)
③ 2022年2月23日(水)

場所

三田こども文化センター

*事前リハーサル ①中野キャンパス教室 ②③生田ボランティアセンター

内容

小学生むけ科学教室の開催

参加

8名 *事前リハーサル 9名

体験

小学生26名

方式

学年の近い小学生2～5人に明大生1人が寄り添う小グループ方式

テーマ

- ① 驚き！色の分解実験～クロマトグラフィー
(いろいろな色の水性カラーペンでろ紙に着色し、水に浸し、色の分解を観察する)
- ② 水と油のマリトツツオ
(いろいろな液体と水を混ぜる／水、ガムシロップ、油で液体の層をつくる／攪拌して観察する)
- ③ カラーペンの色を分けよう
(水性／油性カラーペンでろ紙に着色し、水／エタノールに浸し、色の分解を比較する)



▲テーマ①③ 色の分解



▲テーマ② 水と油

子ども達の感想



- ・ピンク色が水につけると黄色になったり、茶色をつけると下がむらさきになったりしてビックリした。とてもおもしろかった
- ・好きな色で何回もチャレンジできたことが楽しかったです
- ・この色がこんな色になり変化してどうしてこうなったかの疑問に思いました
- ・博士の実験みたいで楽しかった
- ・実験をしてみて「家でもできるんだな」と思った
- ・予想とちがう色になったりしたから楽しかった
- ・すごく広がったのがきれいだった
- ・色んな形に切って色付けたことが楽しかった

企画・運営者の声



国際日本学部2年 住吉華枝
今回の科学実験教室は夏休みに始動してから約4ヶ月、ボランティアセンターにサポートしてもらいながらメンバーで準備を進めました。実験内容から材料選びまで全て自分たちで試行錯誤しながら決めました。

まず、どんな実験をしたいか調べて意見を出しました。5種類以上もの実験を各自でして、実験写真や出来栄え、改善点や気づきなどを共有しました。子供向けの実験をしているはずなのに、どれもなかなか上手くいかず想定外でした。

どの実験をするか決まったらからは、Zoom、LINE、電話、対面でミーティングをすることで意見交換がしやすくなりました。材料や実験の流れをスムーズに決めることができました。

企画参加前は緊張もありました。しかし自分1人でやるわけではなく、協力し合える楽しさがあり、気付けば緊張は無くなっていました。コロナ禍の大学生活では何かを一緒に成し遂げるといった経験が少

ないように感じます。そんな中、対面での活動ができてとても嬉しかったです。6月に参加した科学実験教室ボランティアとはまた違った雰囲気、今回は長期的で主体性が必要だったのでより色々なことを体験し学びました。

ボランティアは「してあげる」というイメージがありますが、実際には「してもらおう」も多く、相互関係であると実感しました。素敵な経験をさせていただきありがとうございました！

総合数理学部2年 堤下 竜矢

科学教室の目的は、参加する小学生が楽しく学べることです。楽しく参加でき、科学的背景を小学生でもわかるように説明できる実験を見つけることは困難でした。多数の実験案をすべて試作し、同じ実験のメンバーとほぼ毎週 Zoom で情報を共有し、実際に集まって試作や準備をしたこともありました。準備は大変でしたが、実験前の段階で万全の体制を整えることができたので、実験は大成功しました。

小学生の理解力と応用力は我々の想像を遥かに超えていて、予想よりもおもしろい実験となりました。実験は水性ペンの色が分解していくことから始まり、それを応用させていろいろな模様を作ってみるという内容でした。

小学生は、1つ目の実験で分解した色や分解具合を見ながら、どのように色を塗ったらどのように色が伸びて分解するかを予測していました。それを利用することで美しい模様を作っていました。子どもたちは我々が事前準備では気づかなかったことに気がついていました。普段小学生と関わることは殆どないこともあり、小学生の頭の柔らかさを直接見ることは貴重な体験となりました。

準備が忙しかっただけに、興味深く非常にやりがいのあるボランティアでした。

商学部3年

私が、今回の科学教室のボランティアに参加した理由は二つあります。

1つ目は、子供たちと触れ合える貴重な体験ができるからです。大学生だと、なかなか、子供と接することはないため、いい機会になると考えました。

2つ目は、企画から当日の運営のボランティアまで参加できることに魅力を感じたからです。一から企画に携われるという機会はなかなかないので、主体的に考えることができるいい機会だと思い参加しました。

企画から当日の運営を通して、大変だったことは事前準備です。特に、当日実験を行うにあたって材料の漏れがないか、当日何人来るのかを想定し、それぞれの材料をいくつ用意したらいいのかということに気を遣いました。ただ、事前準備をしっかりと行ったことで、当日の成功につながり、このことから何事も準備をしっかりとしておくことが大切だと実感しました。

当日、印象に残ったことは、実験の1回目は、子供たちにやり方を示しながら実験を行いましたが、2回目以降は、子供たちが説明を受けなくても、自分たちですぐできるようになっていて、子供の成長の速さを実感したことです。また、子供たちが楽しそうに実験をしている姿を見て嬉しく思い、このボランティアに参加して良かったと思いました。

理工学部4年

実験の結果に目をきらきらさせて、見守る子どもたち。その姿は、事前準備の大変さを吹き飛ばし、やりがいを感じさせてくれました。

私たちは、水と油の分離と比重をテーマに小学生向けに実験を行いました。一部の低学年の子どもにとっては、少し難しい内容だったかもしれません。その中で、積極的に参加し、感動する姿に、こちらが胸を打たれました。原理を学ぶときには、実生活での関連性を見つけて理解をしてくれました。実験中は、水と油によりつくられる層の変化に目をキラキラさせて興奮していました。

しかし、きらびやかな当日とは反対に、準備は地道なものでした。3人の仲間と半年前からオンラインミーティングで企画の検討、構成、試作を行いました。その中で、試作を自宅で1人行うことが最も大変でした。実施までの時間も長く実感が湧かない中での作業だったからです。そんな中、毎回熱心に試作をする仲間のおかげで、前向きにやり遂げることができました。



▲会場の様子

こうして、長い準備を乗り越り当日も成功することができました。全体を通して一番良かったことは、1人1人に、自分たちの実験だという主体感があったことです。準備作業すべてに「何のための作業か」を認識して進められたことが、限られた制約の中でも前向きに最善策を出すことに繋がったと思います。

私事ながら、大学生活最後のボランティア活動を、大きなやりがいを感じることでできた科学教室で締めくくれたことを誇りに思います。

理工学部1年 貫井信吾

私がボランティアに参加したきっかけは、大学生になって今までの人生でやってない事に挑戦してみようと思ったからです。

高校までは、かなり受け身で何かを積極的にしようという人間ではなかったので、大学では積極的に動けるような人間になりたいと思いました。このボランティアも自分が積極的な人間に変わるきっかけになればいいなと思い参加しました。

子供科学教室の本番では事前準備で想定していたように上手に子供たちに説明が出来なくてかなりパニックになりました。本来やろうとしていた実験を完全には実行できず、中途半端な形で終了してしまいました。この活動から、人に教えるという大変さを学びました。事前に説明の仕方を複数用意したり、第三者視点で説明が伝わるかの確認の重要性を知るとともに、自分の想定外の事が起こった時のアドリブ力をもっと付けたいと思いました。

今後、想定外の事が起こった時にうまく対応できるように色々なことに積極的に参加していきたいです。

今回の子供科学教室でやってよかったと思うことは、小学生が実験をしている時に、「楽しい」といった発言をしてくれたことです。企画に参加して本当に良かったと感じました。

法学部3年

この科学教室では、企画から実施までの段階を学生が作り上げていくことから、多くの貴重な体験をすることができました。

まず、企画では子供たちが楽しんで不思議を感じられるような実験内容を練ります。各々から出された実験案を個人で実施し、話し合いを経て、何度かの試作を繰り返すことで実験内容を決めていきました。

そして、実験当日。当初は子供たちと上手くコミュニケーションをとれるか、手順書通りに進行することができるかなどの緊張がありました。しかし、子供たちは積極的に実験に対して興味を示してくれて、容易に打ち解けることができました。

また、子供たちに合わせた実験ペースであったので、それぞれに合わせた対応を行うこともありました。実験材料を多く準備していたことで無事に実験を終えることができました。

夏休みから3月の実施日までの長期にわたる準備は確かに大変です。しかし、実験を通して生まれた作品を大切に持ち帰る子供たちの印象が強く残り、学生同士で一つの企画を作り上げる達成感を得られたので、とても充実した時間を過ごすことができました。

農学部1年

私が、科学教室のボランティアに参加しようと思った理由は、今までやったことのないことに挑戦してみたかったからです。

まず、実験内容を提案するところから始めました。それが決定すると、実験内容の詳細や、材料を考え、試作を行うなど、何回もミーティングを行いました。

当日、私は小学二年生の女子二人を担当しました。正直なところ小学二年生を侮っていました。小学二年生は落ち着きや集中力が無いと思っていましたが、説明を真面目に聞く上に、自分でよりよい手順を発見し、効率を高めていました。

さらに、手順を繰り返す際は、工程を覚えて、説明しなくても自分で実験を進めていました。また、集中して黙々と作業をし、想定していた倍のペースで実験を進めたため、やる事がなくなっていました。実験の工程を考えている際に時間が足りなくなると思い、工程を省いたことを後悔しました。

このことから、最低限行うべきことに加えて、選択肢を設けておく必要があるとわかりました。

また、低学年と高学年で行う実験の内容を分けて考えていましたが、それを共有すべきだと思いました。私が担当した小学二年生には高学年の内容でも十分に理解できたと思います。年齢で内容を分けることは必要ですが、人によって作業の速さや知識量は異なるので、一人一人に合わせて変えるべきだと考えました。このように企画から実施まで携わることはないので、貴重な体験となりました。

キワニスドール作り

キワニスドールは、入院中の子どもが治療の説明を受けたり、治療ごっこをすることで治療の恐怖をやわらげるために使われる、白いのっぺらぼうの人形です。人形作りの工程の中で、綿入れと入れ口を縫うという工程を行いました。

コロナウィルス感染状況を鑑み、学生がキャンパス間を移動せずに参加できるよう、オンラインと対面の二つの方法で開催しました。

- 日時** 2021年10月19日(火)～12月3日(金) 全5回
- 内容** キワニスドール作りのうち「綿入れ」「入れ口を縫う」ボランティア
- 参加** 21名
- 連携** 一般社団法人東京キワニスクラブ

日時	場所	講師	参加
10月19日(火) 15:40～17:00	Zoom	東京キワニスクラブ	2名
10月22日(金) 10:30～12:00	Zoom	東京キワニスクラブ	2名
11月24日(水) 13:30～15:00	和泉キャンパス内教室	学生	5名
11月29日(月) 11:30～13:00	和泉キャンパス内教室	学生	7名
12月3日(金) 11:00～12:30	Zoom	学生	5名

参加者の声



私がこのキワニスドール作りに参加しようと思ったきっかけは、「病気で苦しむ子どもたちの不安を取り除く」というドールに込められた想いに強く惹かれたからです。また、私自身幼い頃に心臓の病気を患っており、この体験を通じて少しでも自分と同じ境遇の子どもたちの力になればと思い、今回の活動への参加を決めました。

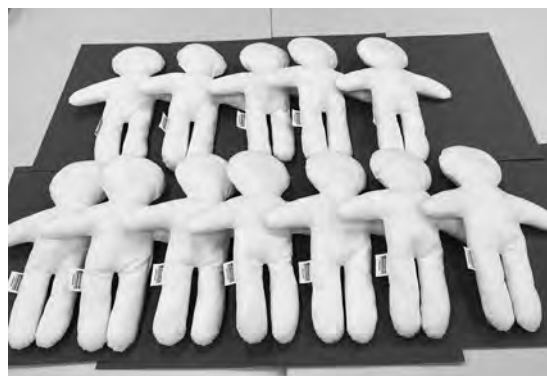
正直なところ、作業は決して楽なものではありませんでした。綿を詰める作業ひとつにおいても、バランスが崩れていないか、綿が偏り過ぎていないか、柔らかさをきちんと保てているかなど、多くの神経を使います。しかし、その分やり甲斐もあります。ひとつひとつ懸命に綿を詰めたドールが顔も名前も知らない子どもたちへのメッセージとなり、心の支えとなる。どこかで誰かの不安を取り除いてくれる。そう思うと、不思議と手が動きました。

明日手術で眠れない子がいるかもしれない。今日がその手術の当日かもしれない。今も必死に病氣と闘っている子がいるかもしれない。私はそんな子どもたちに、キワニスドールを通じて「お大事に」という声を届けることができれば嬉しいです。

法学部1年 小倉光弘



▲綿入れ口を縫う



▲出来上がったキワニスドール

清掃活動 中野

秋学期に入り、大学の活動制限指針が緩和されたタイミングで清掃活動を再開しました。

今回、中野キャンパスに通っている留学生への周知として中野キャンパス1階のラーニングラウンジに清掃活動の掲示を数か所、掲載しました。

コロナ禍以前に活動に参加していた学生と、清掃活動ルートや活動頻度などを相談しながら実施することで、スムーズに進行することができ、継続して参加する学生も増えてきました。

学生からの活動報告にはコロナ禍で交流が少なくなった中、このボランティアイベントを見つけ、参加し、活動の中で交流することができたことへの嬉しさや喜びが綴られており、清掃活動を通じて交流ができたことへの感謝が多く、いかに学生同士の交流が少なくなったのかを知る機会となりました。

今回は各キャンパスから多数参加がありました。また、一人での応募が大半でしたが、話し始めると楽しそうに会話をしながら清掃活動を行っている様子が印象的でした。

日時・回数 2021年10月19日・28日、11月16日・25日、12月2日

火曜・木曜 隔週で計5回実施

場所 中野キャンパス周辺、中野駅前など

参加 38名

参加者の声



国際日本学部2年 小日向弘樹
今回、初めて清掃ボランティアに参加しました。元々、大学に入学する際に漠然と、いつか海外ボランティアをしたいと考えていましたが、新型コロナウイルスの影響を受け、そういった活動に参加することができず、また、ボランティアに参加する意欲も薄れていました。そんな中、中野ボランティアセンター主催の清掃ボランティア参加者募集のメールが届き、出来ることからちょっとずつという思いの元、本企画に参加させていただきました。活動中は、参加者同士で話しながら清掃活動に取り組むことができました。私は国際日本学部属しているため、普段から中野キャンパスを利用していますが、参加者の多くが他のキャンパスの学生であったことに少し驚きました。普段は他キャンパスの学生と話す機会はあまりないため、本企画は参加者同士で交流を深められるきっかけとして良かったです。活動内容もハードルが低く、気軽に参加することができたため、定期的に参加したいと思います。

国際日本学部2年 松澤涼

私は中野で一人暮らしをしているのですが、普段何気なく通っている道を清掃という観点からじっくりと見た時に、私の想像以上にごみが落ちていることに驚きました。

缶やペットボトルなどの大きなものはあまり落ちていないのですが、煙草の吸殻が非常に多かったです。煙草の吸殻は小さいので注意して見なければ気づきにくいのでしょうか。それが今回拾ったごみの8割ほどを占めていた印象です。時間的にごみを拾いきれなかった箇所もあり、そこにはまだまだ清掃の余地があったのかと思うと少し悔しいような気がします。次回の活動の時にその箇所も清掃できたらと思います。

また、今回の活動の中で、他の参加者の方たちとそれぞれ1対1で話しながら清掃をするタイミングがありました。普段キャンパスに行って授業を受けているだけでは関わらなかった他学部の方や留学生の方と話しが出来たことが新鮮で嬉しく感じました。清掃活動をしながら普段関わりの薄い方たちと交流出来た時間はとても充実しており、次回の活動が楽しみです。

農学部3年 瀧羅央

生田キャンパスの農学部から清掃ボランティアに参加させていただきました。中野キャンパスに来るのはこれが初めてで、キャンパスや立地にも新鮮な驚きを感じたとともに、同じ大学でも全くカラーの異なる中野キャンパスや駿河台キャンパスの学生たちと交流するよい機会にもなりました。清掃活動を

していると、地域の方々から「頑張っているわね。」と声をかけられたり、私たちが清掃中に身に付けていた紫紺のビブスを見たOBの方が「懐かしいね。頑張っ。」と言って励まして頂く場面があったりと地域の皆さんとのあたたかい交流があったことが印象的でした。今後もキャンパス問わず様々なボランティアに参加していきたいと思えるような良い経験になったと思います。

国際日本学部3年 池田 麻衣子

1年生の時にこの活動を始め、なんとなくこのまま4年間続けていきたいと考えていましたが、新型コロナウイルスの流行で一切の課外活動ができなくなり、残念で悔しい気持ちでいっぱいでした。状況が落ち着いてきてそろそろ再開できるのではと考えていたところで再び活動が出来たことに嬉しい気持ちでいっぱいです。さらに以前活動していた時の何倍もの人に参加していただき、普段なかなか関わることのない同じ学部の他学年の学生や他キャンパスの方々とは知り合う機会となり、お話し出来ることがとても楽しく、毎回活動に参加するのが楽しみになっていました。コロナ禍で繋がりの希薄化が顕著になったと言われてはいますが、今回の活動を通してやはり人との出会いの大切さを痛感しました。

今回の清掃活動に参加された方はほとんどが1人で参加されていて最初は少し緊張されている様子を感じても、活動後にキャンパスに戻ってきたときにはどの方もとても素敵な表情になっていたのが毎回印象的でした。私自身サークルの代表の仕事を務めている中で、コロナ禍で多くの人と関わることに少し臆病になってしまっていることを感じていましたが、先ほど述べた経験を通して、不安を感じても、勇気をもって一歩踏み出すことで、私たちは本当に心から温まる気持ちになることができるのだということを感じました。今後はほのぼのとしたこの活動のよさを大事にしつつ、細く長く続いていく活動になったらいいと思います。毎回ボランティアセンターの職員さんとは相談しながら活動を進めることができ、とても充実した時間となりました。来年度もよろしく願いいたします。



▲植え込みに隠れているゴミを拾う



▲回収したゴミを分別



▲中野キャンパス1階 ラーニングラウンジ内の掲示

学生の自主的な活動の支援

MIW 祭り(Tree)

日時 2021年10月1日(金) 12:00～20:00・2日(土) 10:00～14:00

場所 九段生涯学習館

参加 12名

内容 千代田区男女共同参画センター MIW による『誰もが生きやすい男女共同参画社会』について楽しみながら学びイベントにて「エコキャップに関する情報掲載とエコキャップ回収箱の設置・回収」を行う

事前にエコキャップ回収後の使い道や途上国へのワクチン提供に繋げる方法を調べ、その後事前調査の内容をまとめたポスターとエコキャップ回収箱を会場に設置した。

新型コロナウイルスの影響で学生が MIW 祭り当日に会場にいることはできなかったが、後日千代田区役所の MIW(男女共同参画センター)に伺い、エコキャップとポスターなどの展示物の回収をした。

センターの役割 連絡調整、相談(駿河台)



私は今回の MIW 祭りに参加したことによって、エコキャップ運動について改めて知ることができました。目的やその後どのようなことに役立つのかを知ることによって、より意欲が湧くと思うので、今回詳しく知ることができてよかったです。また、初めての Tree での活動だったので緊張したのですが、協力して展示物を作ることができて楽しかったです。

普段何気なく目にしているペットボトルキャップを起点にしてワクチンを提供するまでの工程を調べることにより、活動の具体性と意義を再確認することができました。

後日、MIW に伺いエコキャップを回収している間に MIW の方々とお話をしました。その方々曰く、「学生が関わってくると地域や関係者の人たちに活気が生まれる」とのことでした。学生としてできることは MIW 祭りに参加することのみならず、活気づけることもできるのだと気づかされました。今年は新型コロナウイルスの影響で対面での参加はできませんでしたが、毎年学生が関わることが重要であると思います。

明治大学ボランティア団体 TREEが考える エコキャップ運動

はじめまして！明治大学ボランティア団体のtreeです！
私たちはペットボトルキャップの回収、リサイクルを通じたボランティアをしています。
自動販売機やスーパーで日頃購入されるペットボトル飲料ですが、飲み終わった後の分別、皆さんはどうしていますか？
7枚の資料をお読みください。ペットボトルキャップのリサイクルに興味を持っていただけたら幸いです！

▲エコキャップに関する情報掲載のスライド
(一部抜粋)



▲エコキャップ活動啓発のため、掲示されたポスター

エコキャップ回収(Tree)

キャンパス内に設置された回収ボックスでペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後資源として売却され、売り上げを「認定NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて発展途上国の子どもたちのワクチン接種のためにキャップを寄付しています。

日時 2021年4月14日(水)、7月1日(木)、10月15日(金)、12月22日(水)

場所 駿河台キャンパス

参加 20名

内容 駿河台キャンパスにおけるキャップの回収、および回収したキャップの部室への運搬。

回収量 360kg(180,000個、ワクチン180人分)



▲こんなに集まりました



▲仲間と協力して集めます

センターの役割 回収作業の説明、回収作業補助、備品の提供及び貸出(駿河台)



感想

直前でのキャンセルが相次ぎ8人での活動になり、全てのキャップを回収し部室へ運搬するまで1時間程かかるなど少し苦労しました。しかし、コロナ禍にも関わらず、全てのフロアのキャップ回収ボックスに一定のキャップが集まっており、私達のボランティア活動に協力しようとする献身の精神ある学生が多くいることに感激を覚えました。

キャップの回収では、一定のキャップを回収できたボックスはゴミ袋ごと入れ替え、あまりキャップが集まっていないボックスは、既にキャップが入っている袋に入れるなど、ゴミ袋の数を考慮しながら臨機応変に対応しました。活動の最後には全員で集まり、集計を行うことで漏れなくキャップ回収を行うことができているかを確認致しました。(10月25日の活動に参加)

商学部3年 佐々木 和真

今回のエコキャップ回収は総会后、私たち三年生が中心となって行う初めての活動でした。Treeメンバーへの呼びかけなど慣れない中行ったので不安でしたが、代表をはじめとした幹部のみんなと協力し、無事に活動を終えました。対面授業とはいえ、コロナ禍なのであまりキャップが集まってないのではないかと考えていましたが、かなり溜まっていたので活動できてよかったですと思いました。

今後は、定期的な見回りを行い、月2回程度エコキャップ回収を行っていきたいと考えています。

また、参加する人が固定化されつつあるので、活動内容をTreeメンバー間で共有し、皆が参加しやすい雰囲気づくりをしていきたいと思っています。(12月22日の活動に参加)

法学部3年 吉村 野ばら

エコキャップ袋詰め・業者引き渡し(Tree)

エコキャップ袋詰め

- 日時** ▶ 2021年11月12日(金)
- 場所** ▶ 駿河台キャンパス
- 参加** ▶ 学生10名、職員1名
- 内容** ▶ 回収したエコキャップの袋詰め
- センターの役割** ▶ 作業の説明、備品の貸出(駿河台)



▲エコキャップを回収袋に入れ替えます



▲全部で36袋になりました！



法学部4年

私にとっては今回が初めての対面活動でした。エコキャップ班としてメンバーと顔を合わせる機会がほとんどなかったため、不安を感じていましたが、参加者が積極的に作業に取り組んでくれたため、滞りなく活動できました。コロナ禍で入構制限があったにもかかわらず、かなりの量のキャップが集まっていたことと、思っていたよりもたくさんのメンバーが参加してくれたことで、ボランティアに積極的に取り組もうという姿勢の人が多くいることがわかり、感激しました。引き続き回収業者への引渡しにも意欲的に取り組もうと思います。

業者引き渡し

- 日時** ▶ 2021年12月7日(火)
- 場所** ▶ 駿河台キャンパス
- 参加** ▶ 学生3名、職員3名
- 内容** ▶ 袋詰めをしたエコキャップ袋(36個)を回収業者へ引き渡す
- センターの役割** ▶ 連絡調整、作業の説明、作業補助(駿河台)



商学部3年

今回、サークルに所属して初めて活動を行いました。キャップだから、軽いと思っていましたが、持ってみると思っていた数倍重くびっくりしました。作業はリレー方式で進めていたので、教職員の方の応援もありかなり早く終わりました。12時40分に業者の方がこられる予定でしたが、10分くらい早く到着したので次の作業の時も少し早めに準備する必要があるなど感じました。業者の方には、少し緩い袋があるのできつく縛って欲しいとの要望を受け、結びなおした袋もありました。また、その際に縛り方を教えていただき、とても優しい方でした！

いろいろ問題は改善しつつ、次の活動にも積極的に取り組みたいと思います。



▲部室から運び出す様子



▲協力してトラックに運び込みます

明大祭におけるエコキャップ活動(Tree)

日時 2021年10月29日(金)～11月2日(火) 11:00～17:00

場所 和泉キャンパス

参加 24名

内容

- ・キャップ射的の的の作成、景品の用意
- ・呼び込み、ゲーム内容の説明
- ・Treeの活動説明及びエコキャップ活動の啓発
- ・ごみ捨て、テントの設営、解体

センターの役割 相談(駿河台)



▲明大祭の様子



感想

Treeに入ってから初めての対面での活動でした。一般的な射的ではなく、ペットボトルキャップを弾にして手投げ射的にすることで、Treeらしさが出せたのではないかと思います。

無料で参加することができ、参加賞でステッカーを配布したため参加者全員に楽しんでいただくことができました。私たちも参加者同様楽しむことができ、いい思い出になりました。

また、Treeの紹介ボードを使って、活動紹介をしました。オンラインでの活動が多かったため、メンバー以外にもTreeの活動を知っていただける良い機会になったと思います。さらに、参加してくれた人にエコキャップ回収の重要性や意義なども同時に伝えることができたと思います。

文学部3年

エコキャップ回収①(ぱれっと)

キャンパス内に設置された回収ボックスでペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後資源として売却され、売り上げを「認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて発展途上国の子もたちのワクチン接種のためにキャップを寄付しています。

場所 和泉キャンパス

回収 202kg(87,186 個、ワクチン 101 人分)

センターの役割 作業場所等の提供、回収したキャップの保管(和泉)



商学部 2 年 山田 龍
「手軽に出来るボランティアをしよう!」という、ぱれっとの活動目標の中で、誰もが簡単に関わることができる「eco キャップ企画」は、ぱれっとの中でも代表的な活動の一つです。2021 年度は新型コロナ感染症が蔓延する中、明治大学のボランティアサークルを始め、一般のボランティア団体も今まで出来ていた活動ができず、頭を悩ませていたと思います。しかし我々ぱれっとが主とする活動である「ごみ拾い企画」、そしてこの「eco キャップ企画」は幸いなことに実施できたため、私を含めサークル部員が少しでもボランティアに関わることができて良かったです。

さて、この活動をやっていて、気づいたことが二つあります。

一つは、思ったよりキャップの回収率が多いことです。eco キャップ回収箱は大学構内のほとんどの建物に設置されているのですが、どこも空ということはなく、特に人の出入りが多い第一校舎などはかなりのペットボトルキャップが溜まっており、多くの明治学生の皆さんが活動に協力してくれていることを嬉しく思います。

二つ目は、さらに回収率を上げるにはどうしたら良いかということです。まず、活動の目的をもっと広めるべきだと感じました。ペットボトルのキャップを分別してくれた人の中にも、それを集めることが途上国の子供達のワクチンのためになることを知らない人が多いのではないのでしょうか。そこで eco キャップ回収箱の近くにその目的が伝わるようなポスターを貼るなどして、認知度を広めていきたいです。そうすれば、eco キャップ回収に目的意識を持つ人が増え、キャップの回収率も上がるのではないかと思います。

最後に、企画に協力してくれる部員、集めたキャップを保管してくれるボラセン職員のみなさま、そして無料で回収に来てくださる業者の方々など、この企画に関わってくださる全ての方々に感謝を申し上げます。今後も「eco キャップ企画」へのご協力をよろしくお願いいたします。



▲作業中の学生



▲回収後の様子

エコキャップ回収②(ぱれっと) 中野

コロナ禍で2020年度行えず溜まっていた中野キャンパスのペットボトルキャップの回収作業を行いました。

学生の来校数は減っていたものの、2019年度分から溜まっていたキャップは9袋分になりました。

今後の中野キャンパスにおけるペットボトルキャップ回収については、現在ペットボトルキャップの価値が下がってきていること、引き取りに来てくれる回収業者が都内で1件のみとなっているため、レンタカーを借りて回収すると、免許保持者の問題や安全面の問題があることからどのように回収を行うかが検討課題になっています。

清掃員さんに回収したペットボトルキャップをごみステーションで保管していただくことと、ある程度たまったところで中野ボランティアセンターから回収を手伝ってくれる学生を募り回収業者や中野区福祉協議会などへ引き渡すことなどを検討中です。

日時 2021年7月19日(月)

回収 405kg(約175,000個)

参加 2名

センターの役割 回収依頼・補助(中野)



▲中野キャンパスで集まったペットボトルキャップ

千代田区一斉清掃の日(Tree)

日時 2021年11月8日(月) 9:00～10:00

場所 明治大学周辺、公園等

参加 16名

内容 千代田区が実施する地域の清掃活動「千代田区一斉清掃の日」に参加。朝9時にリバティタワー1階に集合し、約5名ずつ2班に分かれてゴミ拾い活動を行う。

班員は燃えるゴミ、燃えないゴミ、瓶・缶、ペットボトルといった役割分担を行い、小さいビニール袋を持ち活動。

センターの役割 連絡、相談、備品の提供(駿河台)



情報コミュニケーション学部4年 平井 夏生

私にとってはTreeに加入してから初めての対面活動であり、思っていたよりも多くの学生が積極的に参加してくれたため、いかに有意義な時間を過ごすかということで、とても緊張していた。

しかし、参加してくれたTreeメンバーは、自分から進んで茂みに入ってゴミを拾いに行く姿があり、皆の協力のおかげでとても有意義な活動となっていた。

今回の対面活動をきっかけに、Treeメンバーが、より多くのTreeの活動に参加したいと考えてくれたら嬉しいと感じた。



▲参加者集合写真



▲清掃風景1



▲清掃風景2

明大前駅周辺清掃活動(ぱれっと)

環境問題への啓発活動を主な目的として公認サークルのぱれっとが活動しています。2021年度の清掃活動は、和泉キャンパス正門から出て、線路沿いの道路を通り、体育館・和泉キャンパス北門までを基本ルートとし、時には、甲州街道沿いに足を延ばして行いました。ごみ拾いをする際は、感染対策として全員がビニール手袋をし、燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトル、びん・かんごみ袋の係をその都度振り分け、トングで収拾をします。集めたごみ袋は、それぞれの重さを測り、記録し、処分します。

昼休みに行うこの活動はメンバー同士のコミュニケーションの機会にもなっており、他の公認ボランティアサークルと合同で活動を行うこともあります。

日時	週1回程度 12:40～13:10
場所	和泉キャンパス周辺、甲州街道沿い、明大駅前通学路等
主催	公認サークルぱれっと
回収	(1回あたり平均)燃えるごみ 0.20kg、缶 0.20kg、ペットボトル 0.25kg、燃えないごみ 0.5kg
センターの役割	作業場所及び保管場所の提供(和泉)



商学部2年 山田 龍

私がこの活動でまず思い浮かぶのは、タバコのポイ捨てがかなり多いということです。落ちているごみの量は、日によって多少のばらつきがあるのですが、タバコの吸殻だけは毎回決まって多い印象があります。この様子を見る限り、タバコをポイ捨てることは普通のごみをポイ捨てることより敷居が低いものと認識されている節があるのではないのでしょうか。確かにタバコの吸殻は小さく目立ちませんが、これがもし風や雨水によって下水などに流されてもしたら、環境や生物に悪影響のある物質が川や海に広がってしまうので、タバコのポイ捨てを甘く見ないでほしいです。次に、この活動の運営者として反省した点は、参加人数が多かった時に、参加者が道に広がってしまい、通行人や自転車、車の邪魔になってしまった場面があったことです。この活動の特色として、参加者がお互い和気藹々と会話をしながら、楽しくごみ拾いに取り組めるという魅力があるのですが、会話に夢中になって、通行の邪魔になっていることに気づかなくなってしまう危険もあります。そのため、もう少しその部分の注意喚起を徹底するべきであったと感じております。しかし、これは逆に活動の際の雰囲気としてはかなり良かったと言えるかもしれません。私自身この活動に2年生から参加し、運営を任されることになり、いろいろ不安だったのですが、多くの1年生たちが積極的に活動に参加してくれ、色々な人が色々な話をしながら楽しくごみ拾いをし、場を盛り上げてくれました。こうした良い面を継続させながら、反省すべき点はしっかりとこれからの活動に活かしていきたいと考えております。

全商品リサイクル活動(MIFO)

「全商品リサイクル」は、明治大学の学生、教職員、また近隣の住民から不要になった衣類などを回収し、ユニクロやNPO団体を通じ難民キャンプに送る、公認サークルMIFOが行っている活動です。また、その活動を通して、学生が主体となって難民の方への実質的な支援を行うと同時に、より多くの大学生、教員等に難民問題を啓発し国際問題への意識を高めることをねらいとしています。

日時 2021年7月5日(月)～2021年7月9日(金) 12:00～14:00

場所 和泉キャンパス第一校舎前

参加 31名

回収 128着

センターの役割 作業場所及び保管場所の提供(和泉)



感想

政治経済学部2年 木村 松高

「全商品リサイクル」は、MIFOの国際支援活動や環境保全活動の一環として行なわれる活動です。学生や教職員より破棄予定の衣類などを回収し、企業へ寄付することで、衣類ロスの削減に貢献すると共に、原材料をリサイクル利用することで、環境への負荷低減を目指しています。更に、企業へ寄付しない一部の衣類は、秋学期開催の「フリーマーケット」活動にて販売を行なう予定であり、売上金は全て難民支援団体へ寄付し、難民が抱える貧困や飢餓等の諸問題の軽減を目指します。2021度の活動では、株式会社ファーストリテイリングに協賛いただき、皆様よりお預かりした計128着の衣服のうち、31着のユニクロ・GUブランドの衣類を寄付致しました。ファーストリテイリングにて回収した衣類は、素材への再生や燃料、難民寄付衣類などに活用されます。活動期間は一週間と決して長くありませんでしたが、私たちの「全商品リサイクル」活動を通して、MIFOメンバーのみならず、学生や教職員の皆様にも、身近にある「衣類」から、環境や難民といった社会問題に目を向け、考えていただく機会を提供できたら幸いです。また、世界規模で取り組んでいるSDGsの「つくる責任・つかう責任」にも貢献できたと感じていただけたら嬉しく思います。



▲活動の様子

フリーマーケット活動(MIFO)

MIFO では、国際支援活動の一環として、「フリーマーケット」を行っています。「フリーマーケット」は、春学期の「全商品リサイクル」において、明治大学の学生や教職員から回収した衣類の一部を販売し、収益を寄付する活動です。

2021年度は11月に中野セントラルパークで開催された「MOTTAINAI フリーマーケット」に参加し、ブース出店の方式で販売を行いました。2日間の売上金の全額を認定 NPO 法人難民支援協会へ寄付しました。

日時	2021年11月20日(土) 9:00 ~ 17:00 2021年11月21日(日) 9:00 ~ 17:00
場所	中野セントラルパーク(東京都中野区)
参加	18名
寄付金額	6,600円
寄付先	認定 NPO 法人難民支援協会
センターの役割	作業場所及び保管場所の提供(和泉)



感想

政治経済学部2年 木村 松高

「フリーマーケット」は、MIFO の国際支援活動の一環として行われる活動で、難民が抱える貧困や飢餓等の諸問題の軽減を目指すと共に、衣服ロスの減少に貢献することで環境への負荷軽減を目指しています。衣類をご提供いただいた皆様や、ご購入いただいた皆様には、私たちの活動を通して、身近にある「衣類」から、難民支援や、つくる責任・つかう責任、ひいては世界レベルで取り組んでいる「SDGs」について考えるきっかけを少しでも提供することができたら嬉しく思います。また、「フリーマーケット」活動で販売する衣類は、明治大学の学生や職員の皆様から回収した衣類ですので、私たち MIFO メンバーの思いだけでなく、衣類をご提供いただいた皆様の思いもお預かりしております。その分、活動を通して得られたやりがいや達成感は、普段のボランティア活動よりも強く味わうことができました。今回の売上金は、認定 NPO 法人難民支援協会に寄付させていただきました。売り上げた金額は決して多くありませんが、困っている人を助けたいという思いの大きさが、金額に左右されることはありません。私たちの努力が少しでも誰かの役に立てるのであれば幸いです。今後の社会情勢は不確かではありますが、来年度に对面で活動を行う機会があれば、「フリーマーケット」を継続して行って参りたいと思います。



▲フリーマーケットの様子

エネルギー環境ワークショップへの出展(SHIP・LINKs)

川崎市立柞形中学校で複数企業が参加して行われるエネルギー環境ワークショップに2020年度から明治大学の学生が出展しています。

2021年度は公認サークルSHIPと公認サークルLINKsが共同で企画を行いました。当日のワークショップは公認サークルSHIPの学生が行い、プラスチックごみによる環境汚染とその解決策をテーマにした講習と実験を行いました。

日時 2021年11月19日(金) 13:40～15:10

場所 川崎市立柞形中学校

内容 中学校の総合的な学習の時間「エネルギー環境ワークショップ」にて環境に関する授業を行う。

- ①プラスチックごみによる環境問題についての講義
- ②微生物によって分解され、自然界に還ることができる生分解性プラスチックを牛乳から作る、作成体験

参加 3名(公認サークルSHIP) ※企画7名(公認サークルSHIPおよびLINKs)

センターの役割 相談・中学校との連絡(生田)

参加者の声



農学部3年 野村 美月

私は今回の環境教室に「一から授業を作り上げる」という点に魅力を感じて参加を決めました。限られた授業時間の中で中学生に自分が学んできたことを伝え、中学生が環境問題を他人事ではなく自分事として捉えるきっかけになるような授業を作り上げたいと考え、授業当日まで何度も話し合いを行いました。今回の授業は「生分解性プラスチック」をテーマに行いましたが、私自身生分解性プラスチックについて知ったのは大学生になってからでした。中学生の知識で生分解性プラスチックについて理解してもらうためにはどうしたらよいか、この点が今回の活動で最も苦労した点です。パワポを用いてただ説明するだけでなく、実験を行いました。実験を通して中学生が生分解性プラスチックに関心や理解を深めてくれたと感じています。

今回の環境教室に参加するにあたって、中学校の教職員の方々に大変お世話になりました。普段の学生生活では関わらない方も接することができ、非常に良い経験となりました。またこうしたご時世の中、貴重な経験の機会を与えてくださったことへの感謝も忘れず、今回の活動で得た学びを今後の生活に生かしていきたいです。



▲講義の様子



▲実験の様子



▲出来上がったプラスチック

華を楽しむ会(Tree)

- 日時** 2021年11月20日(土) 13:00～14:00
- 場所** 神田猿楽町町会詰所
- 参加** 7名
- 内容** 神田猿楽町町内会主催のイベント。神田猿楽町周辺の花壇の花の植え替え・雑草除去作業・街路樹下の花壇の整理などを行う。
- センターの役割** 連絡、相談(駿河台)



▲集中して作業に取り組んでいます



感想

例年参加させていただいている「華を楽しむ会」に参加させていただきました。今回は「ノースポール」と「ビオラ」を植えました。

町内会の方々、他大学の方や社会福祉協議会の方々と協力しながらの活動で、地域の方との交流を通して、その良さを感じることができました。

また、明治大学の卒業生も多くいらっしゃり、当時の話を聞くことができました。

今回のボランティアを通し、町内の景観作りに携わることでその地域の一員になれたように思います。初めてボランティア活動に参加することができ、とても楽しかったです。

文学部3年

さくらキッズとの交流会(Tree)

- 日時** 2021年12月27日(月) 13:00～15:00
- 場所** かがやきプラザ1階ひだまりホール
- 参加** 39名
明大生4名、子ども(年齢7歳～高校3年生)12名、ボランティア17名、職員6名
- 内容** ・さくらキッズ(千代田区子ども発達センターさくらキッズの利用者)の子どもたちと遊びを通じて交流をする。
・「じゃんけん列車」「猛獣狩りへ行こうよ」「なんでもバスケット」「だるまさんがころんだ」の4つの遊びを行う。



▲さくらキッズとの交流会

センターの役割 相談(駿河台)



感想

最初はさくらキッズには様々な年齢の子どもたちがいることを知り、初めて出会う我々とうまく交流できるかという心配がありました。しかしながら、子どもたちはとても元気で優しい子であったためにすぐに打ち解け、楽しく遊ぶことができました。

私が幼稚園の頃に遊んだ時の記憶が蘇ったとともに、遊びを考える側の立場となり新鮮な気持ちもありました。また、さくらキッズのボランティアスタッフさんによる子どもたちへのサポートもあり、トラブルなく最後まで進行できました。

今回このような場を設けていただいた皆様、ありがとうございました。

政治経済学部3年

Tree 総会(Tree)

日時 2021年12月16日(木) 17:00～17:40

場所 駿河台キャンパス

参加 学生9名、明大職員2名、関係機関職員1名

内容 2021年度、Tree総会を対面にて開催。はじめに、Treeの主な活動内容を報告。

その後、参加メンバーの自己紹介を行う。開催時間は30分ほどで、新メンバーを含め9名が参加。

センターの役割 教室の確保、連絡調整、相談(駿河台)



▲スライドを使った活動報告



▲全員で記念撮影

政治経済学部4年 折原 弘太

感想



今回の総会はコロナ禍での開催になりましたが、無事に終わることができ安堵しています。本年は、コロナ禍でのボランティア活動ではありましたが、多くの参加者にとってエコキャップ活動を始め、様々なボランティア活動が充実した時間になったと知り、大変うれしく思いました。また、新代表・新副代表の抱負から、更に風通しの良い団体にすることを目標にしていると知ることができました。これから、オンライン活動含め、次期幹部によって、どのような活動が出てくるのか楽しみです。

学生ネット交流会(Tree)

学生ネット交流会は、千代田区内の他大学のボランティア団体、サークルの方と交流するものです。開催目的は、学生ネットの存在意義の共有や、ボランティア団体間の人同士の交流、千代田ボランティアセンターの主催するボランティア活動への参加の促進です。

当日は、学生ネットの紹介や、簡単なボードゲームで交流しました。

日時 2021年12月17日(金) 17:00～19:00

場所 かがやきプラザ

参加 明大生3名、他大生9名

内容 千代田区内の他大学及び千代田ボランティアセンターとの交流
プログラム内容

- ・学生ネットの説明
- ・各団体の説明
- ・はあっというゲームで交流
- ・クロージング

センターの役割 相談(駿河台)

感想



情報コミュニケーション学部4年 清水 勇吾
コロナ禍初の対面での交流会でした。終始和やかなムードで活動しました。近隣の大学との交流を図ることができ、有意義でした。この場で出会えたメンバーと協力をして、千代田区の大学生ボランティアを活発にさせていきたいと思ひます。

キラキラのクリスマスに

情報コミュニケーション学部3年 小笠原 侑美

2005年12月25日

私が朝起きると、あゆみへ、パパへ、ママへ、とキラキラの包装紙に包まれた3つのプレゼントが置いてあった。中身は私が欲しかったキティちゃんのおもちの掃除機と、パパが欲しかった高そうな赤ワイン、ママが欲しかった黄色い三つ折りのお財布だった。しかも、寝る前に置いておいたクッキーの袋は開いて、数が減っていた。絶対にサンタさんはいるのだと確信した瞬間だった。「あの気持ち」は、夏祭りの後にラムネの中のビー玉を宝物箱の中にしまうことよりもただならなかったし、幼稚園でひたすらダンゴムシを集めることよりも魅惑的だった。

そして、14年後の2019年12月24日

大学1年生になった私は、目の前で「あの気持ち」が発生する瞬間を目撃してしまった。浦和の商店街で、サンタクロースに「メリークリスマス！」と飴を差し出された5歳くらいの少女は、まさしくあの日の私だった。彼女はあまりの衝撃に硬直した後、「おかあさあああんサンタさんに飴もらったああああ」と走り去っていった。

要するに、私にとってチャリティーサンタ*の活動で「あの気持ち」の発生を目撃したことは、ある意味「あの気持ち」よりもただならなく魅惑的で、それは支部を作ってしまうほどであったのである。

さてじゃあ支部を作りましょうかと思った矢先のコロナ禍だった。子供たちに沢山の我慢をさせた2020年、せめてクリスマスくらいは特別なものに。こういった保護者の願いは、悲痛な叫びにも聞こえた。失敗は許されない。というか私が自分に許したくない。ひとりひとりの「その子」にとって、場合によっては人生で1度きりになるかもしれないサンタさんとの出会いを、絶対にキラキラな思い出にしなくちゃいけない。どうか、1人でも多くの子どもたちが「あの気持ち」を経験できますように。

結局、失敗は起きた。でも、実は「あの気持ち」よりももっと大切なことがあることにも気づけた。

そもそも、私がこうして子供たちに愛を配ろうと思えるのは、私が莫大な愛を受けて育ったからに他ならない。ただならなく魅惑的な「あの気持ち」をくれたのは、サンタさんではなく、私の両親であったのだ。

いつか子供たちがサンタさんの正体に気づく時、わざわざチャリティーサンタを呼んだ保護者の願いに気づく時、その子供たちが思わず愛を配りたくなってしまおうような、そんな記憶になるように、これからも最善を尽くそうと思う。

* NPO 法人チャリティーサンタ 世田谷・明治大学支部…筆者が2020年に支部を設立。家庭環境によらず、子どもたちにクリスマスの特別な思い出ができるように、サンタクロースに扮しプレゼントを家庭に届ける活動を行っている。



▲当日のメンバー



▲活動中のようす

ボランティアが学生生活の一部に

農学部2年 菊水 優太

僕が「かわさき芽吹塾*」の活動を始めたきっかけは、この団体の現代表である友人からの誘いがあったからです。高校時代の友人だった彼は、突然「無料塾を立ち上げたい。」と僕に声をかけてくれました。ボランティアに興味はありましたが、団体を一から始めることに、はじめは戸惑いました。

しかし、活動の準備を進めていくうちに新しい経験をたくさんしました。はじめに団体名を話し合い、地域のこども文化センターにチラシを配りました。その後、ホームページを開設し、Twitterで寄付と生徒の募集を呼びかけました。一つ一つが新しいことの連続で、人のために活動しているという感覚より、自分の楽しみのためにこの活動を続けていました。

2021年5月に開校したこの塾は、現在生徒が30人ほど、ボランティア講師は40人ほどの大きな団体となりました。初めて入塾してくれた女の子は、今もなお中学3年生として受験に向けてこの塾に通い続けてくれています。団体が大きくなるにつれ関わる人が増え、様々な人たちと話すことも楽しみの一つになっていきました。

この活動を始める前と後で大きく変わったことの一つは、生徒や他の講師とのコミュニケーションのとり方です。見学に来てくれた生徒など、初対面のときの話し方が以前より柔らかく話せるようになりました。しかし、講師も大学生が中心なので、次は大人の方とのコミュニケーションの上達を目標にしています。保護者の方や地域の方と接する機会も多いので、積極的に交流していきたいです。他には、人に何かを教えることが得意になりました。昔から物事を説明するのが苦手で悩んでいたのですが、多くの生徒と接することで自信がつき、人に説明することが楽しいと思えるようにまで変わりました。

スキルアップしたこともあります。同時に自分の苦手なことや未熟な面もたくさん浮き彫りになりました。運営メンバー内での情報伝達や地域の大人の方たちとの交流の仕方、SNSでの言葉遣いについてなど、難しいと感じることがほとんどでした。しかし、それらの経験は自分の糧になっていて、自分たちで団体を立ち上げたからこそその経験でした。

この経験が今後の自分の人生の何かに役立ち、この活動が誰かのために、社会のためになっていればと考えながら活動に臨んでいます。

*かわさき芽吹塾…2021年5月開校。有料の塾に通っていない中高生を対象に大学生がボランティアで勉強を教える無料塾。



▲準備の様子



▲支援中の様子

活動で感じたやりがいと意義

理工学部1年 中田 樹克

かわさき芽吹塾*での活動を通してやりがいを感じる瞬間は、昔の“わからない”が放置されていたり、何がわからないのかわからない状態だったりする生徒に授業をするときです。生徒と一緒に何がわからないのか考え、生徒に合わせた理解のしやすい説明を模索する作業は根気が入ります。しかしその分、生徒が理解できた時やテストなどで結果を残せたときの嬉しそうな反応は、こちらまで嬉しくなりますし、頑張っってわかりやすい授業を作ろうというモチベーションにつながっています。

学校の授業のみでは十分に理解ができない、そもそも学校に行けていないけれど、様々な理由から通信教育や学習塾の利用、自宅で家族が勉強を見てあげるなどの選択肢を取ることのできない環境は存在し、自力での学習が難しかった場合には“わからない”が放置され蓄積されていってしまいます。そういった環境に置かれてしまっている方達の力になれる数少ない場所が無料塾だと考えています。勉強したいのにうまくできない、塾に行きたいけれど行けない、そんな子供たちや保護者の方のサポートができるよう、いろいろな方法を模索しながらかわさき芽吹塾での活動を続けていきたいと思えます。

*かわさき芽吹塾…2021年5月開校。有料の塾に通っていない中高生を対象に大学生がボランティアで勉強を教える無料塾。大学生が主催、運営している。



▲支援中の様子

「学び合い」から学ぶ「学び」

文学部4年 高橋大輔

まなてら*の活動では、地域の中学校のみなさんの学習のサポートをします。週3回程度の活動を行っており、生徒たちが自分で持ち込んだ宿題や教材を使って勉強しています。

ここまで書くと、学習塾のようにスタッフが勉強を教える場所なのではないか、苦手科目も教えなければいけないのか、と思うかもしれませんが、その心配はありません！

まなてらでは「学び合い」を大切にしています。スタッフが積極的に教えたり手本を見せるというよりは、近くの友達やスタッフとの交流を通じて自分で気づくことを重視しています。（もちろん、スタッフが教える場面もあります！）

このような活動を通して、私は「どんな言葉をかければ、人は頑張れるのか」ということについて考えることが出来ました。例えば得意科目がある生徒には、困っている他の生徒に解き方を教えてみるように声をかけてみると、教えてもらった生徒が理解できるだけでなく「教えることができた！」と、教えた本人も自信をつけることが出来ました。実際に、このようなまなてらでの勉強を続けていくうちに大きく成績が向上した生徒を見ることもありました。「誰かの成長を応援したい」「何かを教えることを経験したいけど、できるか不安…」「教員志望なので生徒と交流する経験を積みたい！」といった方々にお勧めです！私自身も、教員志望であったことからこの活動に携わっていましたが、始める前と活動に参加した後では、生徒や勉強に取り組む側の立場がわかってきたのかな、と感じています。

*まなてら…川崎市教育委員会による「地域の寺子屋」事業のひとつで、川崎市多摩区内の公共施設で行われている。ボランティアスタッフは中学生の学び合う仲間作りに伴走する。



▲支援中の様子

学習支援を続けて得た私の成長

農学部 4年

まなてら*は、中学生を対象とした地域密着型の学習支援ボランティアです。

子どもたちに、さまざまな学習機会を提供することで、学習意欲の向上や豊かな人間性をはぐくむサポートができます！この活動を約3年間続けてきて、自分が変わったなと思う点が3つあります。

声のかけ方の重要性

中学生のモチベーションを維持する為には、私たちスタッフの声掛けが重要になります。学習を促す声掛けをして、中学生のやる気を継続させたりするのが私たちの仕事です。

どのような声かけをするのかによって、中学生の勉強時間が変わるというのが面白い点です。どうすれば他人のやる気を引き出すことができるのか、まなてらの活動で日々勉強させてもらっています。

年の離れている子とのコミュニケーションの取り方

年の離れている子とのコミュニケーションを今までとったことがありませんでした。中学生と話す機会が沢山あるので、自然とコミュニケーション能力が身につきます。率直な意見を中学生は言ってくれるので、今までにない面白い経験です。

少し性格が前向きになる

中学生はすごく元気で、しゃべっているうちに私たちも元気をもらえる気がします。1年も続けていると、少し性格変わったなとふと思う時がありました。

みなさんにおすすめしたいボランティアです！

*まなてら…川崎市教育委員会による「地域の寺子屋」事業のひとつで、川崎市多摩区内の公共施設で行われている。ボランティアスタッフは中学生の学び合う仲間作りに伴走する。



▲支援中の様子

私の大学生生活に彩りを与えてくれたきっかけ

理工学部 2年 前原 陵杜

私は空手を12年間やっていました。その時の先輩が「2020年入学の代はコロナで友達ができなかったり、サークルに入りにくかったり大変だろうし、こういうのあるけどどうかな」とNPO法人good!*のワークキャンプに誘ってくれました。その誘いに対して、人見知りだし、人とうまく話せる自信もないし、参加するかどうか相当悩みました。しかし、それ以上に「何かしなきゃ」という焦りの気持ちが強かったです。だから、少しの勇気を振り絞ってキャンプに参加してみました。

○大変だったこと・嬉しかったこと

ワークキャンプでは力仕事も多く、筋力不足を痛感しました。

でも、それ以上に、コロナ禍で自分が感じてきたことは学生や社会人問わずみんな同じように感じていて、共感してくれることが嬉しかったし、参加者みんな優しかったです。些細なことで「ありがとう」と言い合える空間が非常に温かく、自分のことを見てくれて知ろうとしてくれる人がいることが嬉しかったです。

○理想と現実のギャップ

ワークキャンプは一緒にご飯を食べて寝てといった共同生活をしながら、みんなで働くだけだと思っていたのですが、多くの参加者や現地の方々と話す中で、“自分と向き合う時間”があったことに驚きました。もちろん、これまでの自分の考えや行動と向き合うから、心苦しくなったり、モヤモヤやムズムズを感じましたが、周りの参加者やNPOのスタッフさんがその自分の感情と向き合ってくれました。そこには労働や共同生活だけじゃなく、沢山の温かい言葉や感情がありました。

○前後の気持ちの変化

参加する前の私は何に対しても自信がなく、非常に内向的でした。それに加えてコロナで人と関わる機会が全くなく、人に会うことさえ心配で仕方なかったです。実際参加してみて、自分のいろんな感情に出会えたり、たくさんのことを考えました。何事もやってみること、できる限りポジティブでいることが大事だってそこで気づきました。まだまだ制限は続くし、やるせない思いをすることも正直あります。でもキャンプで出会った皆に、大事なものは心の底から笑うこと、って教わったから、自分の残りの大学生活を諦めず、思いっきり楽しみたいと思いました。この文章をご覧のみなさんも、諦めず少しの勇気を振り絞って頑張ってみてください。応援しています。

* NPO 法人 good! …農作業や牧場作業などをボランティアで行うワークキャンプを開催している。コロナ禍にはきっかけ+仲間づくりキャンプを開催した。



▲ワークキャンプの仲間達

「生きてる！」～クラウドファンディング～

農学部4年 池田 航介

「生きてる」そう実感することはありますか？

ただ呼吸をして無難な人生を生きていると「生きてる」ということすらも忘れてしまうのかもしれませんが。私は自分で会社をたてて生きていく。つまり起業^{*}して生きていくという意思決定をしました。その最初の挑戦としてクラウドファンディングで150万円集める、と。

家族には「バカなの？就職しなよ」と言われ、このプロジェクトに関わる仲間も150万円は高すぎると言います。150万円集まらなかったら0でそのあとの挑戦すらもできません。

しかし、それでも自信はあったし、最高に楽しんでいたような感覚があります。クラファンの期間中は必死でした。1000人くらいにメッセージを送り、色んな場所に赴き、私たちのプロダクトを体験してもらいました。そして結果的に351人の方に支援いただき245万円の支援金を集めることができました。

なんでこんなことをしているの？とよく聞かれます。

もちろん実現したい未来がある、とかこういう課題を解決したいという理由はありますが、実は単純に一步踏み間違えたら死んでしまうような山道を超え、そこから見える美しい景色をみて、「生きてる」と実感したいだけなのかもしれません。

私の挑戦はまだ始まったばかりですがきっとこれからもあえて険しい道を選択していくのだろうなと思います。

^{*}起業…筆者は「環境・経済・幸せが循環する持続可能な社会の実現」をめざす環境団体 Perma Future を設立。クラウドファンディングで集めた資金で、体も地球も健やかになるお茶の開発・製造・販売を行っている。



▲仲間達

与論島軽石拾いボランティア

理工学部1年 下地 蒼

私の祖父が沖縄に住んでいて、電話をした時に軽石があると船が入港できなくて困っているという話を聞きました。沖縄などの離島に行きたいとは思っていたのですが機会が無く行けませんでした。なので今回の与論島での軽石除去ボランティア*に参加できて本当に良かったと思っています。

実際に行くと軽石の凄さがよりわかり、一つ一つは軽いけど集めて袋に入れた軽石を運ぶのが大変ということがわかりました。

1日目から3日目にかけて軽石の除去を行った皆田海岸が4日目の夜に観に行くのと軽石でいっぱいになっていて切ない気持ちになりました。しかし、島民の方も仰っていた通り他の島や海岸に流れ着く軽石を少しでも減らせることができたと思うとやって良かったと思えます。海岸の清掃などは終わりが来るようなものではありません。ですが、清掃を続けることによって少しずつでも綺麗になっていく海岸の様子を見れることは嬉しいです。これからもボランティア活動をつづけていきたいと思えます。

*軽石除去ボランティア in 与論島…日本財団ボランティアサポートセンター主催の軽石を除去するボランティアプログラム。2021年、小笠原の海底火山の噴火によって日本の多くの海、港、海岸が流れ着いた軽石の被害を受けた。



▲スコップで軽石を集める



▲ビニール袋に軽石を詰める

ボランティアセンター来室者・活動参加者

	来室者*	うち学生*	活動参加者**
2013年度	6,057	5,468	
2014年度	6,913	6,216	
2015年度	8,321	7,647	
2016年度	9,417	8,873	
2017年度	10,239	9,581	
2018年度	12,305	11,633	2,601
2019年度	12,008	11,403	2,347
2020年度			2,304***
2021年度	2,241	1,996	1,829
累計	67,501	62,817	9,240

*対面での数

**センター主催・コーディネートでの活動参加者。2018年度から集計。対面またはオンラインでの数

***全てオンラインでの数

外部事業への協力・取材など

外部委員委嘱

- ・杉並区社会福祉協議会杉並ボランティアセンター 運営委員
- ・杉並災害ボランティアネットワーク連絡会 委員

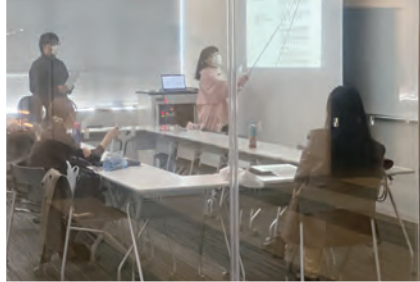
協力（※全てオンラインにて対応）

日時	対応先	対応人数等
2021年9月9日	すぎなみ大人塾方南和泉コース ゲストスピーカー	コーディネーター1名
2021年9月10日	大学ボランティアセンター職員セミナー2021 事例提供	コーディネーター1名
2021年12月13日	関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会 講師	コーディネーター1名

発行物

明治大学ボランティアセンターパンフレット(2021)





2021年度 明治大学ボランティアセンター活動報告書
発行日 2022年11月発行
発行 明治大学ボランティアセンター